

『ホッブズ問題』の原理的考察（三）

——現代的解釈の批判的考察——

オークショットとシュトラウスの論争を中心に——

金 泰 明

目次

はじめに

1. 「ホッブズ・リバイバル」——ホッブズ論争をめぐる三つの説

2. 「ホッブズ問題」と三つの説の原理的考察

（1）「ホッブズ問題」のありか

（2）考察上の三つの留意点

（3）三つの説の原理的検討

（i）実定法説——オークショット

（ii）自然法説——ウォーレンダー

（iii）合理主義説——シュトラウス

3. 結語——権利と義務が一致する地点をもとめて

はじめに

そもそも「ホッブズ問題」の現代的な解釈―オークショットの実定法説・ウォーレンダーの自然法説・シュトラウスの合理主義説―への批判的考察は、本稿の連載第二号^(三)において掲載する計画であった。しかし、その後、筆者の関心は、ルソーの社会思想の歴史的位相の問題とりわけエンゲルス・マルクスの革命思想との対比、ならびにルソーとヒュームとの対立の問題に集中した。

それゆえ若干の足踏みを余儀なくされた。とはいえ、この「足踏み」によって「ホッブズ問題」に関する筆者の哲学・原理的思考はさらに深まったと確信している。いやむしろ、もしこの「足踏み」がなかったならば、「ホッブズ問題」の現代的解釈と、その中心的な論争であるオークショットとシュトラウスの議論を容易に理解し批判することは叶わなかったとさえ思う。

1. 「ホッブズ・リバイバル」――ホッブズ論争をめぐる二つの説

社会学者の大澤真幸は、社会学の基本的テーマは「社会秩序はいかにして可能か」という問いに収斂できるという（以下、傍点は筆者）。その定義は一九世紀のジンメルにはじまり、より明確化したのが二〇世紀初頭のパーソンズで、彼がこの問いを「ホッブズ問題^(三)」と名付けた。しかしパーソンズのみならず、社会学者はなべて問題設定（前提）のなかにひそかに答え（結論）を忍び込ませて説明する、つまり「循環の構図」に陥っている。これは社会学理論のもつ共通の困難である、と大澤は断じる。^(四)

パーソンズは、大恐慌に象徴される激動の一九三〇年代のアメリカ社会を社会解体の危機、すなわちホッブズの自然状態Ⅱ「万人の万人に対する戦争状態」とみなし、「ホッブズ問題」として捉えなおそうとした。ちょうどこの時期に「ホッブズ・リバイバル」が起こる。その一端を担ったのが、マイケル・オークショット (Michael J. Oakeshott, 1901-90) とレオ・シュトラウス (Leo Strauss, 1899-1973) である。

シュトラウスは、一九三六年に『ホッブズの政治学』(Hobbes, *Political Wissenschaft*) を刊行し、情念や意志に基づくホッブズの社会秩序の形成を主張した。すると、翌一九三七年にオークショットは論文「レオ・シュトラウス博士のホッブズ論」を発表。ホッブズの社会秩序はむしろ自然法理論と意志論との融合の産物であるとして、シュトラウスの説を批判的に論評するなど計三度にわたりシュトラウスを批判した。その後、一九五七年にシュトラウスは『自然権と歴史』(*Natural Right and History*) を刊行。古典的自然権 (ソクラテスを創始者とするギリシャ哲学、中世のストア学派とキリスト教思想家たち) と近代的自然権 (ホッブズ、ロック、ルソーとその批判者のバーク) の詳細かつ綿密な考察を行った。そのなかでホッブズを「自由主義の創始者」と呼び、「ホッブズはきっぱりと無条件の自然的権利を一切の自然的義務の基礎に据えた」として自然法は自然権に由来すると主張した。

これに対しオークショットは、一九四六年に論文「リヴァイアサン序説」を発表。ホッブズ的社会契約に向かうための「権利の無条件性の放棄」を「自発的な自己否定の行為を遂行する」義務とみなした。その後一九六〇年にオークショットは「トマス・ホッブズの著作における道德生活」を著し、「人間相互の関係や、人間がおたがいにたいして行使できる力の問題」としての道德的行為の分析を行った。そのなかでシュトラウスの主張を道德的行為に関する「合理主義説」とみなしその「解釈は的外れ」であり「かれ(ホッブズ)には道德理論がまったくなかったと考えなくてはならない」ものとして斥ける批判的見解を展開している。

ホッブズ論争は引き継がれて一九六〇年代にハーワード・ウォレンダーによるホッブズの義務論的解釈をめぐる「義務論争」が展開される。その嚆矢はA.E.テイラーの論文「ホッブズの倫理学説」(The Ethical Doctrine of Hobbes)である。ウォレンダーは、著書『ホッブズの政治哲学―彼の義務の理論』においてテイラーの義務論的なホッブズ解釈を受け皿にしてホッブズの義務論を構造的に捉えなおそうとした。これが後にいわゆる「テイラー＝ウォレンダー・テーゼ」と呼ばれるものだ。

オークショットはこうしたホッブズ論争の流れを道徳的行為や政治的義務の観点からとらえて検討し整理する。ホッブズが、「各人の各人に対する戦争の状態」にあつて「各人は、平和を獲得する希望があるかぎり、それにむかつて努力すべき」であるというとき、この「道徳的行為を：(中略)：ホッブズはいかなる根拠あるいは正当化を用意していたのであろうか」(中略筆者)。オークショットはこの問いを「道徳的行為」の根拠の問題ととらえ、「義務」の観点から、簡潔に言えば「平和への努力義務」の問いとして三つの説に分けて詳細に検討を加えた。三つの説とは、①合理主義説(シュトラウス)、②実定法説(オークショット)、③自然法説(ウォレンダー)である。

三つの説を検討した結果、オークショットはつぎのように結論する。「いまある3つの解釈のうち、第一の解釈はもつとも受け入れがたく、第二の解釈(キウィタズの法にしたがつて平和をもとめて努力するという義務の理解)は、ホッブズ哲学の構造的理解とわたしが考えるものとの齟齬がもつとも小さいので、説得力は最大であると思われる。にもかかわらず、自然法によって課される「自然的義務」(これが第三の解釈の中心テーマである)について：(中略)：実際ウォレンダー氏が説明したように、全体から切り離してみると、これがまともな完結した一個の道徳理論となりうる。」

重田園江は、二〇世紀のホッブズ解釈論争の流れを「ホッブズ問題」の解明の観点から、三つの代表的解釈として

つぎのように簡単にまとめている。^(一四)①レオ・シュトラウスの説…自然状態で人は死の恐怖と虚栄心という二つの情念

にしばられる。死の恐怖は非常に強く、理性の計算に助けられて恐怖心が虚栄心に打ち勝つことで、社会契約が結ばれる。②「テイラー・ウォレンダー・テーゼ」…神の命令である自然法が支配する自然状態において、人は自然法によ

って平和への努力を義務づけられている。③マイケル・オークショットの説…ホッブズの政治秩序は、人間が理性を用いて推論するだけで到達できるものではない。契約と合意によって作りだした政治社会ではじめて、法、義務、モ

ラルが機能し意味をもつ。^(一五)重田の「分け方」は一見してわかるように、オークショットのそれを踏襲したものだ。

一方で社会契約に向かう行為を「道徳的行為」、「政治的義務」であるとする見解があり、他方でそれを情念や意志による「選択」とする主張がある。

ウォレンダーの自然法説は、自然状態において社会契約のために自然権を放棄するのは、神の意志である自然法に従う義務であると考ええる。また、オークショットは、「リヴァイアサン序説」において社会契約のための自然権の放棄を「自発的な自己否定の行為」＝義務といい、さらに神の法に従う自発的行為もありうるとした（後の「トマス・ホッブズの著作における道徳生活」において神の法としての自然法に従う義務があるというのは「いい加減な言いぐさ」だと訂正する）。

一方、シュトラウスは、自然権の放棄を情念による理性が選択した意志の行為とみなす。最も強力な情念は、「死への恐怖」である。とりわけ「暴力死への恐怖」が、自己保存的欲望へと向かわせる。人は、暴力死への恐怖から自己の生命を守るために社会を創設する行為（社会契約）に向かうのだ。「人間は、自分たちの義務を果たす時よりは、自分たちの権利のために闘う時の方が確実に期待できる」。^(一六)

2. 「ホッブズ問題」と三つの説の原理的考察

さて、本稿の目的は、現代におけるホッブズ論争の諸説を「ホッブズ問題」の観点から原理的に考察することにある。ここで考察の対象となるのは、三つの説——実定法説（オークショット）、自然法説（ウォーレンダー）、合理主義説（シュトラウス）——である。

三つの説の考察を進める前に、「ホッブズ問題」とはどのような問いであるのかをあらためて確認しておきたい。社会秩序の創設に向かうなかで、そもそもホッブズは、いったい「いかなる場面」において「何」を問題としたのか。^(二七)

(1) 「ホッブズ問題」のありか

「ホッブズ問題」のありか——その中心点——を最も簡明に捉え説明したのがリチャード・タックである。タックは、ホッブズの社会契約の「問題は、自然状態において約束遵守の一番手となる動機がはたしてありうるのか」ということだという。少し長くなるが、タックの議論を紹介しよう。

『リヴァイアサン』にかぎっていうと（この著作での議論がもつとも完全である）、約束に関するホッブズの議論はほぼ次のようなものである。まず、前提として、もしも二人（ないしはそれ以上の人びと）が、なにかをおこなうという内容（基本的な社会契約のばあいには、共通の主権者の決定に服従するという内容）の約束を相互に結んだとすると、もしも一方がその約束を履行すれば、他方の当事者にはこれを破る合理的な根拠はない、と

いうことがある。なぜなら、唯一合理的根拠といえるのは、自己保存だけだからである。自分でやるといったことをきちんとやる人間は、他人にとってなんら危険ではない。：（中略）：正義とは、他人もまた約束を履行するばあいには、自分もまたこれを履行するという点にある。したがって問題は、自然状態において約束遵守の一番手となる動機がはたしてありうるのか、といった点にある。かれ自身は、自然状態では、そのような（約束遵守の一番手となる動機）の合理的根拠はありえないと考えているようである。『最初に約束を守っても、ほかの人もまたあとで約束を守ってくれる保証はない・・・したがって、さきに約束を履行することは、敵に自分を売り渡すようなものである』。そこで、いったい社会契約はいかにして可能なのかという問題がいぜんとして残るのである。私見によれば、ホッブズ自身の叙述からは、これにたいする明快な答えをひきだすことはできない。」（傍線はタック、傍点および中略は筆者）

はたして「自然状態において約束遵守の一番手となる動機」や「合理的根拠」がありえないとすれば、やはり「社会契約はいかにして可能なのかという問題」＝「ホッブズ問題」が浮上する。これについてのホッブズの議論を辿る前に、少しばかり用語の確認をしておきたい。ホッブズは「契約」と「信約」および「約束」の概念をどのように説明しているか。まず、「契約」とは「権利の相互的な譲渡は、人びとが契約 Contract とよぶものである」⁽¹⁰⁾。物に対する権利の譲渡と物自体の譲渡交付がある。つぎに「信約」とは、「契約者の一方が、かれの側では契約されたものをひきわたして、相手を、ある決定された時間ののちにかれのなすべきことを履行するまで放任し、その期間は信頼しておくということ」である。「この契約は、協定 Pact または信約 Covenant と呼ばれる」⁽¹¹⁾。つまり、さまざまな契約のなかで、信約においては互いの当事者の履行の時間差があることだ。最初に契約をした者は、のちに相手が履行をはた

すと信じている（はたして本当に相手が履行するかどうか、一抹の不安は残る）。さらに「約束」に関して、「約束は信約にひとしいのであり、したがって義務的なのである」⁽¹¹⁾。

さて、相互信頼の信約が無効となるのは、どのような場合か。ホッブズはつぎのようにのべる。重要な箇所なので、少々長くなるが引用する。

「相互の信頼による信約が無効なばあい」当事者のいずれもが現在には履行せず、相互に信頼するという、信約がむすばれるとすれば、まったくの自然状態（それは各人の各人にたいする戦争状態である）においては、なにかもつともな疑惑があれば、それは無効になる。しかしもし、双方のうえに履行を強制するのに十分な権力と強力な力をもった共通の権力が設定されていれば、それは無効ではない。⁽¹²⁾ すなわち、はじめに履行するものは、相手があとで履行するであろうという保証をなにももたないのであって、なぜなら、ことばの束縛 bond は、なかの強制力への恐怖なしには、人びとの野心、貪欲、怒り、およびその他の諸情念を押さえるにはよわすぎるからである。そういう権力は、すべての人が平等で、自分自身の恐怖の正当性についての裁判官である、まったくの自然状態においては、とうてい想定されえない。それで、したがってはじめに履行するものは、かれの生命と生存手段をまもる権利（かれはそれをけつして放棄しえない）に反して、自己をうらぎつてその敵にひきわたすのである。しかしながら、ひとつの権力が想定されて、さもなければ自分たちの誠実を破棄しようとする人びとを拘束する、社会状態 civil state においては、その恐怖はもはや、もつともなものではない。そしてそういう理由で、その信約によつてはじめて履行することになっている人は、そうするように義務づけられているのである」⁽¹³⁾

（傍点は筆者）

ここは注意を要するところであるから、ホッブズの社会契約の特質をいくつかのポイントに絞って確認しよう。

まず、第一の特質について。ホッブズの考える社会契約は「信約」であるがゆえ、いつでも契約の不履行や破棄がありうる。よってホッブズ的社會契約は、不確定で危ういものである。ホッブズは、社会契約（結社行為）を《相互の信頼による信約》というように当事者（二者あるいはそれ以上の者）間の「契約」とみなす。後に詳しく論じるが、「社会契約（結社行為）」と「契約」とは次元の異なる概念である。しかもホッブズのいう社会契約は「信約」であるから双方の履行に時間的なズレが生じうる。つまり、契約の不履行——ホッブズのいう「誠実の破棄」——がありうる。想定される「二者間の信約」それ自体のなかに、「ホッブズ問題」が潜んでいるといえよう。自然状態において「もつともな疑惑」＝生命の危険がある場合には、契約不履行を非難すべき根拠がなくなるからだ。ホッブズの考える社会契約は、実現が不確定で危ういものといわざるをえない。

この点は、あきらかにルソーの社会契約のアイデアとは違っている。ルソーのイメージする社会契約は、当事者間の契約ではなく、すべての構成員による契約＝全員による結社行為である。しかも、「各人は自分をすっかり与えるのだから、すべての人にとって条件は等しい。また全ての人にとって条件が等しい以上、誰も他人の条件を重くすることに関心をもたない」^{（二四）}から、誰も横着したり横暴になったりすることもない。各人の権利の譲渡は「留保なしに行われ」、また「特定の人々に何らかの権利が残る」こともなく、「共通の上位者は誰もいない」。要するに、人びとの結合は最大限に完全に行われるから、だれも要求するものは何一つないという。つまり「各人は自己をすべての人に与えて、しかも誰にも自己を与えない」のである。

さて第二の特質として、ホッブズ的社會契約のもつ実現の不確実性からは、社会契約を確かなものにすべく自然法

（理性によって発見された戒律すなわち一般法則）という名の「義務」が登場する。自然法は、「平和をもとめ、それにしたがえ」といい、「すべてのものに対するこの権利を、すすんでするべきである」と人びとに促す。^(二五) 社会契約Ⅱ結社行為を義務と課すのである。「すべてのものに対するこの権利」とは自然権にはかならない。自然権とは「各人が、かれ自身の自然すなわちかれ自身の生命を維持するために、かれ自身の意志するとおり、かれ自身の力を使用することについて、各人がもっている自由であり、…（中略）…どんなことでもおこなう自由である」。^(二六)

ホッブズの説明に注意深く耳を傾けよう。注意すべきは、放棄すべき自然権とは自己防衛権ではなく、他人を防衛する権利であることだ。なぜならば、「権利を放棄する」とは、「他人がそのものに対する自分の権利からえる便益を、さまたげる自由をすてることである」^(二七) からだ（傍線はホッブズ）。「コモンウェルスをつくるにさいして、各人は、他人を防衛する権利を放棄するが、かれ自身を防衛する権利をではない」^(二八) のだ。かれはコモンウェルス（主権者）に他人の処罰権を与えたのではない。コモンウェルスが有する処罰の権利はかれら臣民の譲歩や贈与にもとづくものではない。かれが自分の生命を守るためにもっている、他人を「殺す権利」を放棄することによって、主権者がかれら全体の維持のために（各人の自然権を代わりに）適当に使用するのを強めたのである。自然権の放棄によってコモンウェルス（主権者）には他人への処罰権が発生するが、（私）は決して自分の生命を守る権利を放棄しないのである。ここからつぎのことがいえる。

第三の特質としては、ホッブズは自己保存の権利（自然権）を最優先することだ。なぜ、はじめに信約を履行する者を裏切りというのか。「なにかもつともな疑惑」、すなわち生命を奪おうとする他者の暴力を前にして自己の生命と生存手段をまもる権利（自然権）をけつして放棄してはならないからだ。ここから垣間見えるのは、「いのち」を最優先すべしという思想である。ホッブズは生命の危険があるときはいつでも自然権（自己保存の権利）が、契約よりも

優先すると考えている。自然権∨社会契約、あるいは自然権∨自然法（義務）なのである。ホッブズは、いついかなるときでも己のいのちを最優先すべしという主張を貫き通そうとする。もし国家が〈私〉に兵士として戦えと命令したり死刑を宣告したりしたら、〈私〉は己のいのちを守るためにそれらを拒否し逃げる自由がある、とホッブズは「いのちの最優先」を固持したのである。この点をシュトラウスは決して見逃さない。「もし唯一の無条件的な道徳的事実が個人の自己保存の権利であるならば、市民的社会は出征と死刑の甘受の二つによって、自己保存の権利を断念するよう個人に対して要求することはほとんどできないであろう」^(一九)。実際、ホッブズは、死刑囚の抵抗の自由と兵役の拒否についてつぎのように述べている。

『人が、かれ自身を防衛しないという信約は、無効である』力に対して、力によって私自身を防衛しないという信約は、つねに無効である。なぜならだれでも、自分自身を死と傷害と投獄からすくうという権利を、譲渡または放置することはできないからであり、したがって、力に抵抗しないという約束は、どんな信約においても、なんの権利も譲渡しないし、義務付けもしない。∴（中略）∴人間は本性によって、抵抗しないことによる確実な現在の死というおおきな害悪よりも、むしろ、抵抗における死の危険というちいさな害悪を、えらぶものだからである。そしてこのことは、犯罪人たちが、かれらを断罪する法律に同意したにもかかわらず、人びとがかれらを処刑と牢獄へつれていくのに武装した人びとをつきそわせることにおいて、すべての人びとに真実として容認されているのである」^(二〇)

『かれらは、自発的におこなうのでなければ、戦争するように拘束されはしない』このことにもとづいて、兵士

として敵とたたかうことを命じられているものは、かれの主権者が、かれの拒否を死をもって罰する十分な権利を有するにもかかわらず、おおくのばあいには、不正義なしに拒否しうる」^(三三)

第四の特質は、ホッブズが想定する自然状態での社会契約は、偶然かつ条件付きものであることだ。ホッブズ的社会契約は信約であるがゆえ相手がいつ履行するかは偶然である。しかも「誠実の破棄」＝契約の不履行者を処罰できる共通権力が存在するという条件下の契約である。共通権力の下で、各人には自然権（自己保存の権利）があり、それによって理性の法としての「平和への努力を命じる」自然法が、各人に自然権（かれ自身の生命を維持し、意志し、力行使する自由）の放棄を「義務」として課するのである。

この点をルソーは、ホッブズが自然状態に自然法＝理性という名の社会的観念を持ちこんだと難癖をつける。一方、自らは一切の規範・関係の「無」にある「純粹自然状態」と「野生の人」という概念から「社会秩序の創成」の問題と格闘したのである。「純粹自然状態」には共通権力といった一切の規範もないし、「野生の人」には言語をはじめ一切の観念も他者との関係も存在しないのである。

ところで、ホッブズが社会契約を「信約にひとしいのであり、したがって義務的なのである」といい、信約を履行するように「義務づけられている」というとき、これを道徳的義務論とする批判が避けられない。たとえば、井上彰は「（恥ずかしい死を避ける）という恐怖から生まれた、仮言的性格をもつにすぎない理性が、道徳的義務を伴った定言的な性格をもつたものに変貌するという飛躍が問題となる」^(三四)という。

カントは、ホッブズの自然法を仮言命法（条件付きの命令）とみなし「普遍法則たり得るものではない」と切り捨てる。ホッブズのいう自然法は、「平和のために、また自己防衛のために必要であると考えられるかぎりにおいて、人

は、他の人々も同意するならば、万物にたいするこの権利を喜んで放棄すべきである^(三三)と要請するが、それは、「取るに足らぬ言辞」であつてとても原理として適用しえないものだ。^(三四)カントは、道徳の実践的法則はあくまで定言命法（無条件の命令）でなければならないと考えるからだ。

以上、「ホッブズ問題」のありかを探ってきたが、これ以降、ホッブズ論争にまつわる三つの説を考察するうえで、ここで格闘すべき問題をつぎのように考えることにしたい。社会契約という名の「約束（＝義務）」に向かう行為を、「道徳的行為」、「政治的義務」の行為みなすべきか、それとも情念が引き起こした意志による行為と考えるべきか。「ホッブズ問題」＝「社会秩序はいかにして可能か」の観点からは、自然権の放棄は「義務」かそれとも「意志」によるものなのかは、すぐれて哲学的原理的な問いである。

（２）考察上の三つの留意点

さて、これから三つの説——実定法説（オークショット）、自然法説（ウォーレンダー）、合理主義説（シュトラウス）——の原理的考察を試みたい。考察を進めるにあたって、これまで発表したいくつかの拙稿を^(三五)とおして明らかにされた「ホッブズ問題」の孕むいくつかの問題に留意し確認しておきたい。それはつぎの三点である。

第一の留意点は、社会契約は「結社行為」であつて「契約」とは異なることである。第二の留意点は、「ホッブズ問題」には、「関係による秩序の領域」（以降、「関係の領域」と略す）と「社会契約による新しい秩序の領域」（以降、「秩序の領域」と略す）という二つの領域があることだ。第三の留意点は、社会秩序生成の探究においては方法的な循環論証が避けられないことである。

まず留意すべき第一の点は、ホッブズ・ロック・ルソーらの社会契約は「結社行為」であって、単なる「契約」とはまったく次元の異なるものであることだ。契約とは、当事者間における権利や義務関係の発生や変更あるいは消滅に関して合意することである。それによって「個の権利・義務」が確定する。たとえば、民法や商取引上の当事者間の契約は、互いの意思表示が「申し込み・承認」というプロセスによって所有物の移転を意味する。いいかえれば、契約は所有物（価値）の交換によって契約当事者双方に等しい「個の価値」をもたらす。

社会契約＝結社行為は、各人が自らの意志で互いの契約によって新しい社会を生み出す行為である。社会契約によって生み出されるものが市民社会である。市民社会のすべての成員は、市民的自由と市民的権利という「普遍的価値」を享受する。社会契約によって創設される普遍契約社会が基盤となつて、普遍ルール社会^(三三)がもたらされる。

留意すべき第二の問題点は、「ホッブズ問題」には「関係の領域」と社会契約による「秩序の領域」という次元の異なる二つの固有の領域があることだ。別の論考で明らかにしたように、「ホッブズ問題」は、「関係の領域」と社会契約によるまったく新しい社会「秩序の領域」という次元の異なる二つの領域を有する。なぜこのようなことが生じたのか。きっかけはホッブズ自身にある。ホッブズは、『リヴァイアサン』において本来異なる概念である社会契約（結社行為）の概念と二者間の契約の概念を区別せずにとんだ同義に取り扱ったからである。先にのべたように社会契約を《相互の信頼による信約》として当事者（二者あるいはそれ以上の者）間の「契約」とみなした。この点は、後世の諸々の研究者に影を落とし議論が錯綜するのである。

たとえば、パーソンズの関心は専ら「関係の領域」に向けられ、社会契約をほとんど評価しない。社会契約を否定するヒュームもまた「関係の領域」に議論を集中させる。《私》と他者との《関係》によって暗黙の合意（コンヴェンション）が生まれ、秩序が保たれるという。正義は《私》のなかにある「正義の観念」から生じるのではない。正義

は〈私〉と他者との「関係」をとおしてもたらされるのである（『人性論』）。

しかし、ルソーだけは違った。ルソーの直観は「ホッブズ問題」には「関係の領域」と社会契約による「秩序の領域」というそれぞれ固有の領域があることをとらえていた。それゆえルソーは、ホッブズが自然状態に社会的観念（自然法＝理性の法）をもちこんだと非難し、自らは一切の関係を規範の「無」の状態から考察を開始した。それが、『人間不平等起源論』（以降、『起源論』とする）の「純粹自然状態」と「野生の人」である。『起源論』では、「無」＝「純粹自然状態」と「野生の人」からいかにして「関係」や「秩序」が生まれるかを考察した。いわば、『起源論』では、「関係の領域」としての諸々の社会状態を詳細に考察したのである。その後、『社会契約論』において社会契約によるまったく新しい社会「秩序の領域」の原理を全面的に展開する。

さて、一方の「関係の領域」では、〈私〉は他者との「関係」をとおして権利や義務を追求する。ここでは、つねに個人としての〈私〉の自由や権利が問題となる。諸個人の関係は現実社会では、畢竟、権力関係の様相を呈する。この領域では支配―被支配の関係の抑制が主題となる。そのために求められるのは、なによりも暴力を抑制することである。この領域では、互いの自由の承認を巡って日々、人びとの間で競争と対立・衝突がくり返され、議論や対話をおして互いに「差異」を承認し合うことが目標となる（自由の相互承認の原理）。さらにまた〈私〉と他者との、差異を乗り越えて互いに共通理解できる部分を発見し拡大することができかどうか、重要なテーマとなる（共通了解の原理）。

パーソンズは、一九三〇年代の混迷を深めるアメリカ社会を功利主義の成れの果ての姿とみなした。功利主義的行為が支配する社会では、必ず秩序が不安定になる。そこでは「人間が互いに他者に対する権力を直接の目的として欲しかつ追求する」ことは合理的である。よって諸個人の間の権力問題が避けられない。パーソンズが権力問題の解決

のために準備したのは、「共通価値による統合」^(三九)である。「共通価値による統合」とは人間の行為に共通する規範的指向性である。人間の意志による行為は必ず何らかの規範的価値に向かう、すなわち、社会的行為は「共通価値による統合」を目指す。よって主体的な「意志」に基づく人間の行為に共通する規範的指向性を理解して整理できれば「ホッブズ問題」は解決可能性がある、とパーソンズは考える。しかしその解決法は、社会契約とは異なる。パーソンズは社会契約、とりわけルソーの社会契約説にはほとんどまったく関心を示さないし言及もしない。パーソンズにとっては、市民社会は既に「在る」ものであって、問題はそこで生じる「権力問題」の解決なのである。

ルソーもまた、「関係の領域」の考察からはじめる。『起源論』において〈関係〉による秩序＝権力関係の様相としてさまざまな社会状態を克明に描写した。自然状態（野生の人が生きる自然）↓人間の誕生↓社会の誕生↓政府の誕生↓専制政治の誕生と腐敗（新しい自然状態）へと歴史は円環上を段階的に進展するが、最後の段階である専制権力が支配する社会では、暴力がはびこり腐敗と不平等が極地に達する。ルソーは、自然状態を起点にさまざまな社会状態を「関係の領域」、すなわち権力関係＝支配―被支配の関係の社会として捉え再現する。専制状態から脱するために人々は社会契約によってまったく新しい市民社会を創設するという「秩序の領域」の議論が展開されるのは、その後の『社会契約論』においてである。

現実の歴史において、たとえば近代市民社会以前にもさまざまな「契約」があった。ソクラテスが述べた国家からの命令は、国家と〈私〉との合意・契約によるものであった。^(四〇)ユダヤ教をはじめとした一神教における「神との契約」は、個人の生活を律する不変の律法となつた。^(四一)また封建領主と臣下との「服従契約」もあった。これらの「契約」は、ルソーらの社会契約とはまったく原理の異なる契約であった。神との契約や服従契約によってもたらされる社会秩序や政治社会の本質は、支配者―被支配者という二者間の「関係の領域」における絶対的な上下関係の秩序である。そ

こは、契約（自由意志にもとづく対等の約束）という名ばかりの形式をとった神や君主による一方通行の法（上下関係の命令）が支配する。神や封建領主が「主権者」として支配し、〈私〉は「臣民」として支配される存在である。神の命令は絶対的でありかつ不変である。封建領主は恣意的に法を変えることができる。

しかし社会契約による「秩序の領域」は、全く新しい政治社会秩序である。「各人が、すべての人々と結びつきながら、しかも自分自身にしか服従せず、以前と同じように自由であること」^(四二)。すなわち、各人が同じく自由でありながら、他者の自由を奪わないし奪われないような関係が保持される原理と方法を備えた社会である。いうならば、社会契約によって普遍契約社会が創り出され、その基盤のうにそれまでの社会とは全く原理の異なる新しい「普遍ルール社会」が生み出されるのである。社会契約によって生み出されるのは、一握りの権力者が支配する諸々の社会状態ではなく、すべての人間が自由で対等な資格で向き合う普遍ルール社会である。

普遍ルール社会では、各人は自由である。〈私〉は私自身を「支配する」のである。^(四三)ここで注意を要するのは、普遍ルール社会とはすべての人々の人間的解放が実現された「完全に自由で平等」な社会ではないことだ。普遍ルール社会で実現されるのは政治的解放、すなわち、各人が普遍的人権を享受することである。そこでは、すべての人々が人権を享受する。各人は一切の属性（特殊性）を問われずに「人格（普遍性）」として平等な存在として承認される（普遍的人権概念）。いいかえれば、普遍ルール社会とは、人間的解放——「完全に自由で平等」な社会——の実現に向けた政治的条件——理念・原理・手立てとしての人権概念——が一般的・普遍的に承認された社会をいうのである。まったく新しい「秩序の領域」としての普遍ルール社会においては、〈私〉は市民となる。ここではつねに〈私〉は市民Ⅱ人権の主体として私の「意志」が問われるのである。

さらに留意すべき第三の点は、「循環の構図」に関するものだ。社会秩序の探究を進めるのに「方法的循環論証」は

避けられない。循環論証には、「論理的な循環論証」と「方法的循環論証」があることを見落としてはならない。論理的循環論証とは、結論が探究手段のなかにすでに前提されていることだ。大澤のいう問題設定（前提）のなかにひそかに答え（結論）を忍び込ませて説明する方法とは、論理的循環論証である。大澤が禁じ手にすべしと指弾するのは、論理的循環論証にはかならない。しかし注意すべきは、人間存在の意味、「関係」や「秩序」の問題を問う営みにおいて見られる「循環の構図」は、いうならば方法的循環論証というべきものであって、論理的循環論証とは本質の異なる方法であることだ。この点を看過してはならない。人間存在の意味の探究には、何らかの暗黙の了解なしには一歩も理解しえないように、社会秩序の探究においてもたとえば「言語」＝「関係性」といった概念を前提する。つまり、「方法的循環論証」を用いなければ、考察を進めることはできないのである。

この点に関して大澤が指摘したパーソンズの「循環の構図」は、その実は方法的循環論証というべきものであった。いうならば、考察の際に形而上学的概念¹¹、「第三の規範的要素」を持ちこまないという条件付きでの方法的循環論証である。たとえば、ロックに対する批判がそうである。ロックは所有権の由来を説明するのに「神」をもちだし、社会契約に至るのに「諸利害の自然な一致」という「（形而上学的）な仮定」をもちこんでしまっている。論証の際、「超越者」としての神の絶対性や聖書などの形而上学的な観念——パーソンズのいう「第三の規範的要素」——をもちこんではならない。「社会秩序はいかにして可能か」という問いと格闘するには、そもそも人間の行為は「社会的行為」なのであるという前提から出発せざるをえないとパーソンズは考える（パーソンズは方法的循環論証を用いている）。ルソーもまた然り。ルソーは、ホッブズが自然状態に自然法（理性の法）という名の社会的観念をもちこんで考察を進めたと論難し、自らは『起源論』において一切の規範も関係も「無」である「純粹自然状態」と「野生の人」から探究を進めはじめた。「純粹自然状態」という一切の関係や規範の「無」のなかに在る「野生の人」は、「自由な行為者」という性質と「自己を完成する能力」、そして生まれた「関係の知覚」によって言語を手にして「関係世界」に

向かう。が、しかし、途中で言語が先か社会が先かを巡って堂々巡りの議論に陥ってしまう。後に『言語起源論』では「言葉は最初の社会的な制度である」と認めて考察を続けるのである。循環論証を禁じ手にして、社会が生まれる以前の最初の状態（純粹自然状態）に立ち戻って最初の一步から「社会秩序はいかに可能か」という問いに真つ向から立ち向かったルソーであったが、結局、「言語＝社会的な制度」という前提に立って社会秩序生成の問いの考察を再開するのである（ルソーもまた、方法的循環論証に陥ったのである）。

（3）三つの説の原理的検討

さて、先に述べたように、オークショットは、論文「トマス・ホッブズの著作における道徳生活」において、ホッブズ論争の流れを「平和への努力義務」＝社会契約に向かう道徳的行為や政治的義務の根拠の問題ととらえ、①実定法説（オークショット）、②自然法説（ウォーレンダー）、③合理主義説（シュトラウス）の三つの説に整理して批判的検討を加えた。ここでは、まずオークショットが三つの説それぞれをどのように捉え批判したのか、その要点を紹介する。そのうえで、先に私が示した「ホッブズ問題」に関するいくつかの留意点——①「結社行為」と「契約」、②「関係の領域」と「秩序の領域」、③「論理的循環論証」と「方法的な循環論証」——を踏まえて原理的考察を試みたい。

（i）実定法説——オークショット

● 実定法説についてのオークショットの説明

—— ホッブズによれば、あらゆる道徳的義務は法から生じる。自然的でどこから獲得したのでもない立法権威のよ
うなものは、ホッブズには存在しえない。義務は法からしか生じない。

公民法が義務的事であることに疑いがなく、「自然的」な義務をともしなうなら別の「自然的」な法を反映して
いるからではなく、もっぱら公民法制定者の性格と、その公布、解釈のしかたに由来する。

「なぜ私は私のキウイタスの主権者の命令にしたがうべく道徳的に拘束されているのか」という問いは、「なぜなら
この私は、他者との間で自分自身への同様の誓いのかたちで合意し、また信約を結ぶという共通の意向を持つて主権
者に『授権』したからには、この主権者が疑いの余地なく立法者であることを知っており、またその命令が本来の意
味でいう法であることを知っているからだ」という以外の答えを必要としない。

神の法が本来の意味での法になるのは、神が代理人をつうじて主権を行使する公民的主権者のときだけである。だ
が自然権は、ホッブズによれば義務ではなく、人間の義務とはなんの関係もないのである。

道徳的義務に関するホッブズの思想について疑問が一つ残る。公民法の存在しないところに本来の意味での法はあ
るのかという問題である。平和をもとめて努力する人間の義務は、公民法の出現とともに止まる。すなわち法と呼
ばれるに唯一ふさわしい法がこの努力を命じるのである。

この解釈には主たる三つの反論がある。

第一の反論…ホッブズにとっては信約を守る特別の義務など存在しなかった。平和を求める努力は、それを命令す
る法が存在してはじめて義務となる。しかし信約を締結する活動は、他者の履行可能性を望む「慎慮の行為」もしく
は無条件の「高貴さ」の行為である。

第二の反論…平和をもとめて努力することであり、本来の意味での法によって命令される場合にはじめて義務となる。しかし平和をもとめて努力する義務と、法のさだめる活動を遂行する義務と区別できない。「平和を求める努力すること」が一個の義務である場合、それはいつでも法に従う義務であり、法とはつねに特定の命令や禁止の集合である。こうして平和をもとめて努力する義務は、法の定める活動を遂行する義務と区別できない。

第三の反論…ホッブズ的自然法（理性の法）はせいぜい平和の条件に属する行為を「提案する」自然理性の「指示」「結論」「定理」にすぎず、主権者（キウイタス）の理性的（だが道徳的ではない）基盤ではない。

——（以上、オークショットの説明の要約）

オークショットのみる実定法説のポイントを取りだそう。自然状態にあらかじめなんらかの義務があるわけではない。自然権も義務とは無関係である。神の命令でさえ代理人としての公民主権者がないと法とはいえない。平和のための信約は「慎慮の行為」、「高貴さ」の行為にすぎない。ホッブズは平和のための「努力義務」と「法の下での義務」を混同している。ホッブズ的自然法（理性の法）はせいぜい平和の条件に属する行為を「提案する定理」にすぎず、主権者（キウイタス）の理性的（だが道徳的ではない）の基盤ではない。主権者の定める公民法があつてはじめて平和のための努力が義務となるのである。

義務に関して、オークショットは論文「トマス・ホッブズの著作における道徳生活」（一九六〇）に先立って論文「リヴァイアサン序説」（一九四六）のなかの一節「義務の理論」^{（四四）}において、ホッブズのいう「義務」について詳細に検討している。

●ホッブズの「義務」についてのオークショットの説明

「義務の理論」の一節は、オークショットがホッブズのいう「義務」をどのようにとらえたのか、そしてその限界を埋めるために自然状態における「義務」の実行性は不十分かつ不安定とみなしていることを知るうえで重要な個所である。よって少々、要約が長くなることを断っておきたい。

□「リヴァイアサン序説」の一節「義務の理論」の要約

——ホッブズの出発点は、ありとあらゆるものにたいする各人の自然権である。∴「義務付けられる」とは自由を自己賦課的に一定量削減することなのだ。∴義務付けられるためには、あるいは義務をもつためには、人間は自分を義務づける行動をみずからやつのけなければならない。厳密に言えば、「すべての人間は、ひとしく生まれながら自由なのだから、誰にとつても、その人自身のある行為から生じたのではないような義務は存在しない」^(四五)のである。ここにいう行為は、自分が意志し実行する力もあることをなんなりとおこなう無条件的な権利が拘束されることを承認し、あるいはみずから拘束を課して、自分の自然的自由を縮小する行為でなければならない。自分で課したのであれ承認したのであれ、この拘束は限定され特定されたものでなければならない。おのれの権利を完全に放棄すれば自己の抹殺になってしまうし、そもそも義務づけるものが何もなくなくなってしまふからである。すなわちこの行為は、権利の放棄ではなく、権利の無条件性の放棄でなければならない。さらに、この拘束が外的でなければならないとしたら、権利の無条件性さえ取りのぞけば生じるというものではありえない。放棄されるものはすべて誰かに向けて放棄し、それをこの誰かが権利によって自分の物にしなければならぬのだ。最後に、義務の不履行があったというだけで、

引き受けた義務が消滅してしまうことなどありえない。義務が終わるのは、終了すべしという合意ができるとき、あるいは義務が自然的な終結・約束の履行——に到達した場合にかぎられる。

さて、義務を負うとは常に自発的な自己否定の行為を遂行することなのだから、つねに何がしかの利益があるという見通しがあつてのことに違いない。いかなる人も、不利益になると分かっているながら、自分の無条件的権利を一部であれ自発的に「奪われる」はずはない。

ところで誰もが認めうる唯一の「善」のうちで、最大のものは、死を回避することである。人間がみずから束縛したり、義務を負ったりするのも、ひとえにこの目的のためである。こうして人間は互いに約束を結び合つて相互信頼の合意に至り、自分の欲求の満足をより確かなものにしようとくもろむ。こうした義務は真正のものである。自発的に引き受けた義務だからこそ、引き受けた本人が反故にすることはないはずである。にもかかわらず、約束に応じる人、すなわち相互信頼の合意で第一の履行者になる人の境遇は、依然として一が八かの冒険なのだ。

しかし、やはり自発的行為の結果ではあつても、さほど短命ではない義務を人間が手に入れる方法がひとつある。計算的行為にかんする自然理性の定理（「正直は概して最上の策なり」のような公理）が、もし神の法であるとみとめられるなら、さらにこの神が自分の神であつて、自分がこうしたルールの妥当範囲内にいるとみとめられるなら、人間はこのルールに従つて行為することを承認し、ルール遵守の義務を負うだろう。

このような状況下では、承認という自発的行為によつて、人間は神の命令というルールにしたがつたことになる。神が立法者であり全能であることをしつており、だから自分が神の臣民であることは承知したのである。とはいえ、依然として神の法にしたがわない自由もある。神は全能であつても、不服従にたいして処罰する力をそなえた代理人を地上にもたない。この義務は、純粹であるが不完全な「道徳的」義務の例である。

では公民的義務とはいかなるものか。公民的義務は自発的行為から生じる。この行為は多数者間の觀念上の信約であり、理性によつて各人の権利が放棄され、主権的行為者にはこの権利を各人の代わりに行使する權威が授けられる。信約当事者たちがまえもつて服従を誓約する行為のルールを宣言し、解釈し、執行する權威である。しかし当事者たちは、たがいにそのような合意を形成する義務などない。理性と恐怖に教えられてそうするだけである。こうして、公民的義務は一個の「道德的」義務になる。——（以上、要約）

オークショットの考えをポイントの流れを追いながら整理しよう。ホッブズの出発点である自然権（すべてのものにたいする権利）は、無条件の権利である（権利の無条件性）。自然権の放棄とは、「権利の無条件性の放棄」でなければならない。しかし自然権を無条件で放棄した（誰かに向けて放棄した）だけでは、その行為は「拘束（義務）」とならない。外的な義務となるためには「それ（放棄した自然権）を誰かが権利によつて自分のものにしなければならぬ」、つまりその外的なものが「コモンウェルス（主権者）」である。義務は、「自発的な自己否定の行為」を遂行することであるが、そうすることができるのは何がしかの利益を見通してのことである。最大かつ唯一の利益は「善」が、死の回避である。人は死を回避するという目的（「最大善」）のために義務（自然権の放棄）を負うのである。義務は真正のものである。義務は自発的な行為だから、本人から反故にすることはありえないはずである。

しかし、「にもかかわらず、約束に応じる人、すなわち相互信頼の合意で第一の履行者になる人の境遇は、依然として一が八かの冒險なのだ」。自然状態における自然権の放棄は、たしかに義務といえるかもしれないが、きわめて不確定で不安定な義務であるのだ。だからこそ、義務を安定的かつ確実に遂行させるためには（自然状態を脱して）外的な力（ルール）が必要なのである。このルールは、仮に「神の法」であっても、「神が自分の神であつて、自分がこうしたルールの妥当範囲内にとみとめられるなら」、それでもいいのだ。重要なことは、人間が「ルールに従つて行為

することを承認」することであり、「ルール遵守の義務を負う」ことなのだから。とはいえ、神は全能であっても、不服従にたいして処罰する力をそなえた代理人を地上にもたない。この義務は、純粹であるが不完全な「道德的」義務なのである。また、公民的義務は、当事者たちには合意を形成する義務などない。理性と恐怖に教えられてそうするだけである。こうして公民的義務は、一個の「道德的」義務になる。

さて、オークショットは、論文「トマス・ホッブズの著作における道德生活」の最後の「補論」において「ホッブズ問題」を全面的に検討している。^(四六)以下、要点を取りまとめる。

□「トマス・ホッブズの著作における道德生活」の「補論」の要約

——自然状態にあつてさえ、人間は相互に契約や合意や信約などを結ぶことができる（これは本当だ）。だが自然状態における契約は、安全への保障を欠く状態に実質的な変更を加えるどころか、それ自体が不確実性に蝕まれている。そしてこれはとくに相互信頼の契約にあてはまる。信約当事者の一方が取引上の自分の役割を先に履行しなければならず、裏切りにあう危険があるからである。そうすると、このような状況でも契約や結ばれ実行されるし、相互信頼の契約すらあつて不思議ではないといえ、分別のある人なら誰も引き受けようと思わない危険がつねにともなうため、万人に対する万人の戦争を緩和するといつてもたいしてあてにならない。

しかし、信約遵守を強制する権威があると万人の承認する「共通権力」が存在すれば、状況は変わるだろう。そこでホッブズはこう問う。この「共通権力」はどんな「原因があつて生じる」と想像すればよいか、その性格はいかなるものでなければならないか。

そのような「共通権力」が設立されるにはひとつしか方法がない、とかは告げる。すなわち、各人が各人と信約を結んで、自己を統治しおのれの本性を保全する各人の自然の権利と、おのれの欲望の満足を確実なものにする（そんな程度の）各人の自然の力とを、ひとりの人間あるいは人々の合議体に譲渡するのである。「こうして各人の人格になる者が、共通の平和と安全にかなんすることがらについて、みずから行為し、あるいは他人に行為させるあらゆることを、各人は：自分がその本人であることを承認し、そしてここにおいて各人は、かれらの意志をかれの意志に、かれらの判断をかれの判断にしたがわせる」^{四七}。

若干の難問が生じる。共通権力を樹立する手段とされる信約が、ホッブズのいう相互信頼の契約であることに誤解の余地はなく、また信約を結ぶのは自然状態にある人間である。したがって、相互信頼の契約もおよそ信約の例外ではありえず、第一の履行者にとって道理に合わないほど危険なおこないであり、それゆえ分別のあるひとならあてにしないと考えられる。

いま、われわれは、そのような権力をどうすれば、『設立』できるかについての知的に理解可能な証明をもとめている。ホッブズは二重で考えていた。まず、たとえ約束をかならず守るといふ理にかなった期待がなくても、第一の履行者になることは理にかなっている。さらにかの数の信約当事者が約束を守る、という理にかなった期待は實際存在する。

この信約の当事者は、いくばくかの危険をおかすが、これは道理に合わないほどの危険ではない。なぜなら、当事者が失うものといつても、獲られるものにくらべれば取るにたらないからであり、また実際、誰かがこの信約の第一の履行者にならなければ、平和に必要な「共通権力」はけつして存在しえないからである。

主権的権威の行使に権威を授ける信約（社会契約・結社行為）と、二者間のふつうの相互信頼の契約には意味の違

いがある。主権的權威に服従する多数者間の信約においては、仮に全員が履行しなくても一部のひとさえ履行すれば、第一の履行者もほかの各自発的履行者もなら損はしないのである。自発的に服従する頼もしいひとがそのつど十分な数だけいて、そういう輩を恐怖で服従させる程度の權力を主権者に授けてくれる、と考えるのは理にかなっている。それで十分なのである。もっぱらこの信約（主権的權威の行使に權威を授ける信約）にともなう危険が、ふつうの相互信賴（契約）にともなう危険にくらべればるかに理にかなうという証明である。

わたしは以上の説明が不完全もしくは未完成かもしれないという疑念をもたざるをえない。——（以上、要約）

「補論」で興味深いのは、オークショットが「社会契約」と「二者間の契約」とを分けて考察していることだ。「二者間の相互信賴の契約」＝信約の場合、一方が履行しなければ約束は破綻する。しかし、「社会契約」は強制力をもつ何らかの主権者が存在すれば、必ずしも「全員参加」でなくてもいい、履行する「一部のひと」＝多数決で結構と考える。大切なことは、メンバー全員が社会契約に参加することではなく、社会契約によって「權威」をもつ主権者を生み出すことだから。權威ある（あるいは強制力のある）主権者さえいれば、人びとは法に従う、つまり義務を遂行するのだから。こうした発想は、明らかにロックやルソーの社会契約説と異なる。ロックはたしかに多数決を唱えたが、それは社会契約によって市民社会が創設された後の政治社会における議決原理をいっただけである。また、ルソーの社会契約説は、「少なくとも一度だけは、全員一致あったことを前提とするものである」として（四六）いる。

（ii）自然法説——ウォーレンダー

●「自然法説」についてのオークショットによる説明の要約

——この解釈は、ホッブズにとって道徳的義務がある種の法に由来することをみとめる。真正なる法の存在するところには義務があり、法なきところには義務もない。したがって、妥当かつ普遍的に適用可能な法が存在して命じる場合に、平和をもとめて努力することは万人の義務になるのだといえる。

ホッブズにしたがえば、法が課す義務の源は法そのものではなくその作者であり、この作者は法の作者であると知られているだけでなく、命令する権利をもっていることも知られていなければならない。自然法にはその作者として万人に自然的に知られている作者がいる、とホッブズが信じていたのはまちがいない。つまり神そのひとである。神の立法の権利は、その命令に服従するべき人が神を創造したことに由来するのではなく、神の全能に由来する。自然法は本来の意味での法である、と主張されるのだ。自然法は全能の神の命令であると知られているのだから、万人をあらゆる状況下で拘束する、というわけである。

この解釈を受け入れるにあたって障害となる第一の難点は、われわれの自然的知識には人間の行為に命令する法の作者としての神の知識が含まれる、とホッブズが考えていたかどうか、はなはだ疑わしい、まだということである。

ホッブズにしたがえば、平和をもとめて努力する義務を課す法の作者としての神は、全人類の統治者ではなく、こうした性格をもつ神を承認し、それゆえ神をこの法の作者として知っている人びとにとってだけの統治者なのだ。ホッブズはどこかで、自然法は神の法だからわれわれはそれによつて義務づけられていると語っていた、などというのはいい加減な言いぐさである。仮に自然法が本来の意味での法だとしたら、その意味は、自然法は神が作ったと知っている人びとにとってだけ本来の意味での法だ、ということである。ホッブズは自然法が本来の意味での法であり、平和をもとめる努力に向けて全人類を拘束すると考えていた、という命題は、真剣に受けとめることはできない。――（以上、要約）

オークショットは、ウォレンダーの自然法説を当初——「リヴァイアサン序説」のなかで——「一個の道徳理論となりうる」と評価する。しかし後に「トマス・ホッブズの著作における道徳生活」のなかでは「いい加減な言いぐさ」だとまったく否定するのである。また、ホッブズが社会契約を神の法に由来すると考えていた根拠は薄弱である。神の存在を信じる人は、神の命令としての自然法に従う義務があると信じるだろう。ただそれだけのことであって、神の法にもとづく自然的義務は、根拠のない主張なのである。このようにオークショットは自然法説をほぼ全否定する。これに対して、ウォレンダーは、ホッブズの政治理論は全能の神に由来する道徳的義務によって基礎づけされていると主張して、オークショットを批判する。

「ホッブズの政治社会の理論は、義務の理論に基礎つき、その義務の理論は基本的に伝統的な自然法に属するものである。諸々の自然法は、神の命令として永遠かつ不変である。自然法は人びとに正しく判断するように義務づける。そうして人びとは全能の神に属する臣民であるという信念にもつに至るのである。」^(四九)

自然状態には道徳的義務が存在しないとオークショットはいうが、そうではなく「自然状態はいかなる義務もない状態ではなく、多くの義務が効力をもたない環境におかれた状態なのである」^(五〇)。主権者が設立される以前の自然状態にも、神の意志である自然法に従う義務＝自然的義務（natural obligation）が存在するのである。しかし、その実効性の条件が欠如しているために、自然的義務は「停止された義務」にとどまっているだけなのだ、とウォレンダーは反論する。^(五一)

ここで検証されねばならないのは、はたして「法の作者としての神の知識が含まれる、とホッブズが考えていたか

どうか」である。いいかえれば、ホッブズが、自然状態における自然法を神の法としてみなしていたかどうかである。この点に関して、藪本沙織の論文「ホッブズ道徳哲学における自然法^(五二)」における指摘は的確である。藪本は、ホッブズの著作の丹念な読解をとおして、ホッブズの記述には「神の法」と「理性の指図」という両義性が見られるという。「ホッブズのテキストを中立的に読む限り、ホッブズが自然法を神の法とみなしていないと断言することは不可能である」。ただし、一六四〇年代のホッブズの著作——『法の原理』、『市民論』——では〈自然法＝神の法〉としているが、一六五一年の『リヴァイアサン』ではそのような權威づけを行っていない。

そのうえで、自然状態において自然法に由来する責務（義務）が存在するかどうかを、〈自然法＝神の法〉の場合と、〈自然法＝理性の指図〉の場合を分けて考察する。

まず、〈自然法＝神の法〉の場合。ホッブズは、「語（ことば）によって支配するには、そういう語（ことば）があらか知られることを、必要とする。そうでなければ、それらは法ではないからである」^(五三)（括弧内は筆者）といったつづ、神の法は神が語る言葉であるからして、どのような言葉が語られたのかを知ることなしには法たりえないという。法でなければ、〈神の法としての自然法〉は義務づけることは不可能である。ホッブズは神について語っても、人間が神の言葉を知ることができる、とは言っていないのである。

「神との信約」について、ホッブズはつぎのように明言している。

『神との信約も、特別な啓示がなければ、ない』神と信約を結ぶことは、超自然的な啓示によってか、あるいはからのもとでかれの名において統治するかれの代理人によって、すなわち神がはなしかけるものの媒介によるものでなければ不可能である。なぜなら、そうでなければわれわれは、われわれの信約が受容されるかどうかを、知

ることができないからである。」^{（五四）}

こうして藪本はつぎのように結論する。主権者の存在しない自然状態においては、神の言葉を人間が知ることはできないから、神の法は自然状態においては法たりえず、義務づけの力もないのである。^{（五五）}

つづいて〈自然法＝理性の指図〉の場合。結論から先にいえば、理性の指図としての自然法は、自己保存に反することを禁じる。つねに己の生命を守れと命じる。ホッブズは、自然法による義務付けを「内面の法定」と「外面の法定」とに分けて論じている。

『自然法は、良心においてつねに義務づけるが、結果については、安全保証があるときにのみ義務づける』自然法は、内面の法廷において義務づける。いいかえれば、それらは、それらがおこなわれるべきだという意欲をもつように、拘束する。しかし、外面の法廷において、すなわちそれらを行為にうつすことには、つねに拘束するのではない。なぜなら、ある人が謙虚で従順であつて、かれのすべての約束を、他のだれもが履行しない時と所において、履行するとすれば、それはかれ自身を他の人びとの餌食にし、かれ自身の確実な破滅をまねくだけであつて、そのことは自然の保存を目ざすすべての自然法の基礎に反するのだからである。」^{（五六）}

自然法の義務づけはつぎの条件付きである。すなわち「安全保障がある場合」もしくは他人もまた自然法に従うという確証がある場合においてのみ、自然法は〈外面の法廷における責務〉を課することができるのである。しかし、そうした安全保証を確立ができるのは、主権者（コモンウェルス）だけである。

以上の蔽本の考察は、オークシヨットの疑問を解き解く。すなわち、オークシヨットのいう自然法説の第一の難点——自然的知識には人間の行為に命令する法の作者としての神の知識が含まれるかどうか——にたいして、答えはNOだといえる。

ウォレンダーがいささか強引に思える自然法説を展開した背景として、矢島信はつぎのように指摘する。ウォレンダーはホッブズの名譽を回復する必要から義務論的な解釈を打ち出した。ウォレンダーの懸念は「ホッブズが自己利益に基づく政治的義務のための議論を基礎づけたという不名誉から救われる必要があったと感じた」というネーゲルのことばを紹介している。^(五七)

私が思うには、ウォレンダーは一方で、自然状態には道德的義務が存在しないというオークシヨットに反論し、他方では、無条件の自然的權利を一切の自然的義務の基礎に据えたシュトラウスに反撃するために、強引な義務論的解釈^{II}自然法説を展開したのである。動機はともあれ、神の命令による永遠で不変な自然法が人びとに正しく判断するように義務づけるとホッブズが主張した、とするウォレンダーの自然法説はまったくのこじつけで説得力に欠けるもので、一種のアナクロニズムといわざるをえない。

(iii) 合理主義説——シュトラウス

●合理主義説についてのオークシヨットによる説明の要約

——各人には、あらゆる状況下で、「おのれ自身の本性の保全」をもとめて努力する権利がある。おのれ自身の本性

の保全を求める努力とは、平和をもとめて努力することである。それゆえ、あるひとが正しいのは平和をもとめて努力するときであり、不正になるのは戦争をもとめて努力するときである。要するに、義務は、「自己矛盾的」でないという意味で、「合理的」な気質および行為と同一視される。自分の本性を保全しようとする人間の努力は良心によって是認され、それ以上のことをやろうとする努力は否認される。こうして、恥辱にまみれた死への恐怖から生まれ、この恐怖をやわらげるためにする行為だけが、良心の是認をうけるがゆえに、義務的なのである。正と力を同一視しない。これは道徳的行為を計算的に合理的な行為のことだと考える教義である。正しい人とは、恐怖によって従順になった人なのだ。だが、これ以上のことやこれ以外のことをホッブズは語っている。

（つぎに、オークショットは合理主義説を批判する）

第一に、「平和をもとめて努力せよ」という問いにたいして、この立場は一つの問いをひきおこす。なぜ各人が自分の本性の保全をもとめて努力することだけを義務にするのかが知りたいのだ。この立場は、各人には自分自身を破壊する危険をおかさずに行動する義務がある、とホッブズが考えていたという信念にもとづいている。しかし、ホッブズは、各人には自分自身の本性を保全する権利があり、権利は義務ではなく、いかなる種類の義務も生み出さないと語っただけである。

第二に、義務的な行為とは、「一貫した」ないし自己矛盾のない行為という意味での合理的行為のことであり、この意味で、合理的であるから義務的だ、とホッブズが語っているとみる解釈は的外れである。しかしホッブズは、たんに合理的な行為と義務的な行為を明確に区別したのだといったほうが無難である。

第三に、この解釈は、道徳的行為がすべての他者を自分と同等な者として私心なく承認する行為であることをみとめない。しかし、それこそホッブズが平和の基本とみなしたことなのである。恥辱にまみれた死への懸念や嫌悪は、

平和をもとめて努力する義務をわれわれが有する根拠ではないからである。根拠ではなく原因ないしは動機なのだ。「理性」はホッブズにとつていささかも指令する力を持たないからである。要するに、ホッブズには、道徳理論が、まったくなかつたと考えなくてはならないのだ。——（以上、要約）

オークショットは、「合理主義説」のいう合理的行為（＝義務の自己との無矛盾性）を「的外れ」として一蹴し、他者を私心なく承認することをきとめないといふ非難する。この点に関して、実際、シュトラウスの主張は「利己主義説」^{（五八）}とも称されることもある。では、しかし、はたしてシュトラウスがホッブズの政治哲学・社会思想をいかに理解しているのか。しばしばシュトラウスの主張に目を移そう。

● シュトラウスのホッブズ理解

ここでは、シュトラウスがホッブズの哲学や社会・政治思想をいかに理解していたかを、『ホッブズの政治学』^{（五九）}第二章「道徳的基礎」と第四章「歴史」、第五章「新しい道徳」および『自然権と歴史』第五章「近代的自然権」の「ホッブズ」の節より要点を取りだして整理してみたい。

□ 『ホッブズの政治学』の第二章「道徳的基礎」の要点抜粋（〔〕内は筆者による補足）

——政治学の諸原理は、……経験を通して——各人が自分自身で手にいれた経験を通して——提示されるもの、いやむしろ各人の自己認識、自己吟味の努力によつて獲得されるものだ。

「人間的欲望について」

ホッブズは、その政治論の根底にある人間的自然についての教説を二つの確実な要請（公準）へと総括した。第一の要請は、「自然的欲望」＝「それによって各人は、共同の事物の使用をもつばら自分自身のためにだけ要請する」。第二の要請は、理性である。人間の場合には獸的欲望がさらに理性を意のままに用いることができるという。人間的欲望が獸的欲望から本質的に区別されるのは、人間の方は自ずから無限に欲望することによってである。人間の自然的欲望たる貪欲な力の追求は、人間が自分自身の力を眺めて得る喜び、すなわち虚栄心を根拠としている。人間の自然的欲望の源泉は、知覚ではなく虚栄心なのである。

この（優越性の）追求は、優越性つまり承認された優越性をひけらかして自己満足にひたりたいという人間の意志、すなわち虚栄心のなかに動機を有するのである。万人は万人に対して優越しようとし、まさしくそのことによって万人を傷つけるがゆえに、結局のところ万人は万人に対して敵なのだ。

人間の自然的欲望が高慢、野望、虚栄心であるということ以外に、国家にはいかなる存在理由もないのである。

「善と悪について」

ホッブズが「生命の維持」という積極的表現よりも「死の回避」という消極的表現の方を好んでいることは、注目に値する。生命の維持こそが第一の善であると語るのとはただ理性だけである。それに反し、死は第一の悪であると語るののは、死の恐怖という情動である。生命の維持は第一の善であり、幸福は最大の善であるが、最高の善、すなわち精神がそれを享受すること、安らぎを得られるであらうような善は、存在しない。これに反し、死は第一の悪である

とともに最大の悪であり、また最高の悪である。死は最大の善を含めてありとあらゆる善の否定でもあるからである。最高善というものが存在しないのに対して、死は最高の悪なのだから。われわれは死を直接的に恐れるのに対して、われわれが生を欲するのは、理性的な熟慮が生命こそわれわれの幸福の条件であると語りかけたうえのことであるから。われわれは生を欲するよりも限りなくはるかに多く死を恐れるから。

しかし悲惨な苦痛に満ちた生の方が死よりもはるかに大きな悪でありうる。それゆえ、死一般が最大かつ最高の悪なのではなく、苦痛に満ちた死、暴力による死こそが最大かつ、最高の悪なのである。苦痛に満ちた死一般ではなく、他人の手によって人間を脅かす暴力による死こそが、ホッブズにとって唯一語るに値するものなのである。

死への恐怖こそが、法と国家の源泉なのである。

ホッブズ政治論の出発点となる対立は、一方における自然的欲望の根源としての虚栄心と、他方における、人間に道理を弁えさせる情動としての暴力による死への恐怖との対立である。ホッブズは人間の自然的欲望を虚栄心に還元するがゆえに、自己保存の追求などではまったくなく、ただただ暴力による死への恐怖だけを道徳の原理として承認することができるのである。他人に対する勝利こそが、自然人の目標であり幸福なのである。——（以上、要点抜粋）

ここでのシュトラウスの主張のキーワードは、〈暴力死への恐怖〉である。ホッブズ政治論の出発点は、虚栄心と暴力死への恐怖という二つの情動の対立にある。とりわけ暴力死への恐怖という情動が、理性（という名の自然法）を動かす。暴力による死という最大最高の悪が、法と国家が生み出される根拠である。

対するオークショットは、人は死を回避するという目的（＝最大善）のために義務（自然権の放棄）を負うと考える。善を目的として実定法と国家が生まれる。善のために秩序はあるのである。

さらにまた、「善か悪か」を巡る二人の対立は、幸福に関しても捉え方が大きく異なる。シュトラウスは、幸福は最

大の善であると認めるが、最高の善ではないという。精神の安らぎ（エピクロスのいうアタラクシア）のような幸福Ⅱ最高の善を唾棄するのである。シユトラウスによるエピクロス主義の否定、この点をオークショットは受け入れがたいものと批判する。これに関しては、後に詳しく述べることにしたい。

□『ホッブズの政治学』の第四章「歴史」と第五章「新しい道徳」の要点抜粋

人間世界の秩序は超人間的な秩序に基づいているのではなく、ひとえに人間意志のなかにのみその根拠を有するのだとすれば、人間世界の秩序にわたる哲学的ないし神学的保証といったものは何ら存在しないことになる。その場合人間が、己の世界を秩序づける能力が自らに備わっていると確信できるのは、人間が現に秩序づけの活動を行っている、という現実性によつてのみである。

最善の国家形態に関する問いに、人間の本質、つまり、宇宙のなかで人間の占める位置を遠望しつつ、解答を与えようとせず、むしろ人間の生の経験と応用を顧慮しつつ、そしてそれゆえとくに情念を顧慮しつつ、解答を与えようとした。

人間は、実際、宇宙の巨大な力からは善ではなく、せいぜい暴力をしか経験しえないがゆえに、神の抗い難い力と呼べるかもしれない、人間の幸福や不幸にはまったく冷淡な運命のなすがままになりながら、人間には、自らを自分で助ける以外の他の選択は残っていないのである。つまり、かれは、感謝しつつではなく、自己の自由に対する真面目で気の滅入るような自己意識のなかで、生きていかなければならない。

人間の正しい振る舞いは、もっぱら正しい自己意識から、すなわち人間個人の、他の個人との関係における自分自

身についての意識からの流出として理解される。正しい自己意識とは、他の人間個人との関係における人間個人の、自分自身についての正しい意識のことなのである。——（以上、要約抜粋）

シュトラウスは『ホッブズの政治学』において「新しい道徳的態度」を唱えた。人間世界の秩序は超人間的な秩序（神の命令）によるものではなく、人間意志にのみ根拠がある。人間が現に秩序づけの活動を行っている現実性とは、自己意識をもつ人間同士の関係そのものである。シュトラウスのいう人間の「秩序づけの活動」とは、〈私〉と他者との関係世界をいう。第二節「道徳的基礎」では、〈私〉のなかの暴力死への恐怖という情動が理性（自然法）を動かすとした。第五節「新しい道徳的態度」では、自己意識をもつ〈私〉と他者との関係が秩序（法や国家）をもたらしという。

□『自然権と歴史』第五章「近代的自然権」の「ホッブズ」の節の要約抜粋

——市民的社会はその根拠、正義のうちではなく、不正のうちにもつものである。あらゆる国家（コモンウェルス）の中でもつとも有名な国家の創建者は兄弟殺しであった。いかなる意味における正義も、それが可能になるのは、社会的秩序が確立した後のことである。ただ人為的秩序の内部においてのみ可能なのである。

大多数の人間にあってほとんど四六時中最も力強く働いているものは、理性ではなく情念である。自然法は、もしその原理が情念の信任を受けなければ、つまり情念に一致しなければ、効力を発揮しないであろう。

あらゆる情念のうちで最も強力なものは死の恐怖である。さらに詳しく言えば、他人の手にかかる暴力死への恐怖である。暴力死への恐怖が、すべての自然的欲望のうちで最も強力でかつ基本的な欲望、根源的欲望、自己保存的欲

望を最も強く表現している。

もし自然法が自己保存欲から演繹されなければならないとしたら、基本的な道德の事実は義務ではなく、権利ということになる。すべての義務は、自己保存という基本的で譲渡できない権利から派生するものである。

国家の有する役割は、各人の自然的権利を保護することにある。義務とは区別された人間の権利を政治の基本的事実とみなし、国家の役割は人間の権利を安全に擁護する点にあるとする政治理論を、自由主義と呼びうるならば、自由主義の創始者はホッブズであつた。

ホッブズはきつぱりと無条件の自然的権利を、一切の自然的義務の基礎に据えた。人間の権利は、各人が何らかの仕方で見事に欲求しているものを表し、あるいは表しているはずだからである。それらの権利は、各人が現実に認め、あるいは簡単に認めさせられる各人の自己利益を聖化するものである。人間は、自分たちの義務を果たす時よりは、自分たちの権利のために闘う時の方が確実に期待できる。

個人がすべての点において市民社会に先立つという主張がなければ、自然的権利の義務に対する優位を主張することはできないであろう。市民的社会や主権者のあらゆる権利は、本来的に個人に属する権利から派生するのである。

自然状態は、そこには完全な権利のみが存在し完全な義務は全く存在しないという事実によって、根本的に特徴づけられることになった。もしすべての人が自然本性的に自己保存の権利をもつならば、自己保存に必要な手段への権利も必然的に持つことになる。ここで、いかなる手段が人間の自己保存にとって必要かを誰が判定するのかという問題、あるいはいずれの手段が適切かつ正当であるかという問題が生じてくる。ホッブズによれば、本来各人が各自の自己保存のために何が正しい手段であるかの判定者なのである。よって、知恵よりも同意が優先する。

主権者が主権者であるのは、彼の知恵によるのではなく、根本契約によって主権者に任じられたからである。さら

にこのことは、主権の中核となるのは、思慮や理性の働きではなく、命令あるいは意志であるという帰結、あるいは法が法であるのは真理や合理性によるのではなく、ひとえに權威によるのであるという帰結に導く。ホッブズの教説によれば、理性から区別された權威の至上性は、個人の自然的権利の極度の拡張から導かれるのである。

自己保存は平和を求める。道徳法はそれゆえ、平和が実現されるために遵守されるべき規則の総体となった。もし唯一の無条件的な道徳的事実が各人の自己保存への自然権だとするならば、したがって他人に対する一切の責務は契約から生じるとすれば、正義の徳は契約履行の習慣と同じものとなる。正義はもはや、人間の意志から独立した基準に従うことにあるのではなくなる。すべての実質的責務は、契約当事者の合意から生じるのであり、したがって実際には主権者の意志から生じることになる。他の一切の契約を可能にするのは社会契約であり、主権者への服従の契約だからである。

ホッブズは政治的快樂主義（善いことは快いことと基本的に同一のこと）を可能にするために、エピクロスの自然状態に反対した。エピクロスは厳密な意味での自然状態（人間の自然状態は悲惨であること）を暗黙理に否定していたからである。エピクロスは必要な自然的欲求と不必要な自然的欲求を区別し、安らぎの状態＝幸福のために「禁欲的」ライフスタイルを求めた。市民社会の存立は自然権の存否にかかっていると考えるホッブズは、「現実主義的な」政治理論の観点から、エピクロスの自制的な要求を「ユートピア的」と退けたのである。

主権の権利が最高権力に付与されるのは、実定法や一般的慣習に基づいてではなく、自然法に基づいてのことである。

国家「すなわち正しい社会秩序」確立の問題は、いかに困難に見えようとも、悪魔の国民にも、もし彼らに分別があるならば解決可能である。つまり、彼らが啓蒙された利己心によつて導かれるならば解決可能である。

最初の力の哲学としてのホッブズ。「力」は、一方で力能、他方で権能（あるいは権利や支配）を意味する。人間の力能とは、何を人間はできるかであり、権能（一般的に権利）は何を人間はできるかが許されるかである。ホッブズは、道徳的・政治的教理の全体を建設するにあたっては、極限状態（自然状態、イギリス内乱の経験）をその土台に据えた。彼が自然状態の教理の基礎に置いた経験は、イギリス内乱の経験だったからである。人間生活において最も強力な力である暴力死への恐怖が、眼前にあからさまになるのは、社会組織が完全に崩壊されつくした極限状態においてである。しかしホッブズは、暴力死への恐怖がもつばら「日常的に」あるいは大抵の場合に最も強力な力であることを、認めざるをえなかった。

暴力死への恐怖の圧倒的な力にが、限定的な妥当性しかもたぬことを明快に示す二つの政治的に重要な現象。第一に、もし唯一の無条件的な道徳的事実が個人の自己保存の権利であるならば、市民的社会は出征と死刑の甘受の二つによって、自己保存の権利を断念するよう個人に対して要求することはほとんどできない。ホッブズは、正当に法的に死刑の判決を受けた者でも、「彼の生命を奪おうとする者」に抵抗して自分の生命を守る権利までも失うのではない、ということ（^{六〇}）を認めて一貫性を保った。が、実際には、政府と個人の自己保存の自然権との間には解決不可能な対立が存在することを認識していた。この対立は、ベッカリアによって解決された。ベッカリアは、自己保存権の絶対的優先から死刑廃止の必然性を導出したのである。「軍隊が戦う時、一方または双方に逃亡者がでる。しかし彼らが裏切りからでなく恐怖からそうするならば、不正にではなく名誉を汚してそうしているのだとみなされるのである」^{六一}。そのことによって、国防の道徳的基礎を破壊したのである。このような難問を解決する唯一の道は、戦争の追放あるいは世界国家の設立である。――（以上、要約抜粋）

ここで『自然権と歴史』第五章「近代的自然権」の「ホッブズ」でのシュトラウスの主張のポイントを確認してお

こう。

(一) 理性ではなく情念が自然法を求める。自然法は情念に一致してこそ効力を發揮する。

(二) 死の恐怖が最も強力な情念である。暴力死への恐怖が、最強の基本的・根源的な自己保存的欲望である。

(三) すべての義務は、自己保存という基本的で譲渡できない権利から派生するものである。

(四) 国家の役割は、義務とは区別された人間の権利を安全に擁護する点にある(自由主義)。自由主義の創始者はホッブズであった。

(五) 無条件の自然的権利が、一切の自然的義務の基礎である。

(六) 人間性の期待は、自分たちの義務を果たす時よりは、自分たちの権利のために闘う時にこそみられる。

(七) 個人が国家や社会に先立ち、市民的社会や主権者のあらゆる権利は、本来的に個人に属する権利から派生する。

(八) 自然状態は、そこには完全な権利のみが存在し完全な義務は全く存在しない。すべての人が自己保存に必要な手段への権利も必然的に持つ。本来各人が各自の自己保存のために何が正しい手段であるかの判定者なのである。

(九) よって知恵よりも同意が優先する。主権者が主権者であるのは、彼の知恵によるのではなく、根本契約によって主権者に任じられたからである。

(一〇) 主権の中核となるのは、思慮や理性の働きではなく、命令あるいは意志である。

(一一) 自己保存は平和を求める。よって道徳法は平和実現のための規則の総体となった。

（一二） 正義の徳は契約履行の習慣と同じものとなる。正義は人間の意志から独立した基準（神などの超越存在）に従うことではない。

（一三） ホッブズは政治的快樂主義の観点から、エピクロスの理想的自然状態（禁欲的生活による幸福）を排し、「現実主義的な」政治理論に置きかえた。

（一四） 主権の権力が最高権力に付与されるのは、実定法や一般的慣習に基づいてではなく、自然法に基づいてのことである。

（一五） 最初の力の哲学としてのホッブズ。人間の力能とは、何を人間はすることができるかであり、権能（一般的に権利）は何を人間はすることが許されるかである。

（一六） 暴力死への恐怖がもつばら「日常的に」あるいは大抵の場合に最も強力な力であるが、個人の自己保存の権利という唯一の無条件的な道德的事実の前には、出征と死刑の場合は限定的な妥当性しかもたない。

シュトラウスは、己の欲望と権利を起点にホッブズの政治哲学をとらえる。自己保存の欲望は、「死の恐怖」とりわけ他者からの「暴力死への恐怖」という情念を生み出し、その情念が理性を動かして己自身の意志によって、人びとは自然権（他者を殺す権利）を放棄する。はじめに自己保存の権利ありき。たとえ国家でさえ、自己保存の権利を断念するように個人に対して要求できない。（いつ、いかなるときでも、生きよ）。つねに己のいのちが最優先する。自然権（自己保存の権利）が自然法（理性の法）を呼び起こすのである。

悲惨な自然状態（万人の戦争状態）から出発するホッブズは、エピクロスの「安らぎの状態」＝幸福な自然状態を否定しなければならなかった。万人の戦争状態を抜け出して主権者（コモンウェルス）が生み出されるのは、実定

法によるもの（オークショットの説）や一般的慣習によるもの（ヒュームの暗黙の了解・コンヴェンション）でもなく、自然法（理性の法）による意志の選択の結果なのである。

3. 結語——権利と義務が一致する地点をもとめて

これまで、現代のホッブズ論争の主な三つの説を「ホッブズ問題」の観点から原理的な考察を試みた。「ホッブズ問題」を検討するうえで深い示唆を与えてくれたのは、オークショットとシュトラウスの考察と議論である。

本稿の終わりに、まず、オークショットとシュトラウスの主張の対立点を整理し確認しておきたい。つぎに「ホッブズ問題」の観点から三つの説にたいして私なりに論評を加えることによって本稿を締めくくりたい。

□ オークショットとシュトラウスの主張の対立点

まず、オークショットとシュトラウスのホッブズ論の対立点を整理、確認しておきたい。オークショットは、「シュトラウス博士に賛同できない点が多々ある」という。が、私の考えをいうならば、両者の主な対立軸はつぎの三つである。第一に、「暴力死への恐怖」の捉え方の相違、第二に、権利と義務のいずれを出発点とするか、第三に、エビクロス主義の評価を巡る齟齬である。

シュトラウスは、ホッブズの思想をつぎのようにとらえる。暴力死への恐怖という情動が理性を動かし、「平和のために努力せよ」という自然法を呼び起こす。法と国家は、暴力による死という最大かつ最高の悪を根拠に生み出され

る。悪から秩序がもたらされるのである。国家の役割は、義務よりも権利を保護することにある。

ルソーは、「情念の力が人間同士を対立させ戦わせる」、「悪そのもののうちから、悪を癒すべき手段を探してみよう」といい、スタロバンスキーも「病のなかに病を癒す」力を見出そうといった。それは絶望のなかにあってもあきらめずに「それ以外ない道」を探しだすことだ。暴力死への恐怖が、すべての自然的欲望のうちで最も強い基本的・根源的な自己保存的欲望なのである。そうだとすれば、すべての義務は、自己保存という基本的かつ決して譲渡できない権利から導き出されることになる。無条件の自然的権利が、一切の自然的義務の基礎となる所以である。

自己保存の権利の中に自然法の原理を見出す点で、ルソーはホッブズと一致している。自己保存の権利は、自己保存のために適切な手段が何であるかについての唯一の判定者たる権利が各人に備わっていることを意味する。社会どころか社会性すら存在しない自然状態における生の特徴は「孤独」である。ホッブズとルソーは、正義の根拠を、あるべき人間ではなく、「あるがままの人間をとらえること」、したがって人間の本性から見出そうと試みる。^(六三)「権利の平等、およびこれから生ずる正義の観念は、それぞれの人が自分のことを先にすることから、したがってまた人間の本性から出てくる」というルソーの含蓄あることは、人間同士の関係——対立や衝突——を通して一切の「共に生きる」ための観念が作りだされることを語っている。

個人が国家・社会に先立つ（個人主義）と考えるシュトラウスは、正義や権利、したがって道徳の基盤は「個人」と「個人」の関わりの中で生み出されると考える。（私）という個人と他の人間個人との関わりが「秩序づけの活動」にはかならない。人間の「関係」を通して権利や正義は実現するのである。

個人とは、己の欲望に忠実でつねに自由から出発する人間をいう。個人の欲望を考えると、「エピクロスのなした必要な自然的欲求と不必要な自然的欲求の区別」を拒否し、ありのままの人間の本性から出発すべきである。エピク

ロスのような心の安らぎだけが幸福ではないし、ましてや安らぎを得るために禁欲的生活を営むことが善ではない。心の平静不動の状態を幸福。「快」「善」とみなしたエピクロス主義はユートピアであって現実から乖離している。「善」は欲望や感性の抑制・否定によってもたらされるのではない。善も悪も、理性も欲望・感性も人間の有様なのだから、ありのままの人間から出発して政治哲学や社会哲学を構築すべきである。このようにシユトラウスは考へる。

ありのままの欲望を持ちながら個人は日々の「関係」を生きる。そのとき、互いの欲望と自由を巡って対立や衝突を避けられない。対立・衝突を緩和し解消しようとして、正義や権利といった観念が生み出される。そうして法（＝義務）がもたらされる。こうした観点から、シユトラウスは エピクロスのめざした禁欲的生活による幸福を否定し、「現実主義的な」政治理論を採用したのである。

私が見るには、シユトラウスのホッブズ理解のかなめは、欲望する個人から出発し、関係を通して権利や義務が確められるとする点にある。そうしたホッブズ理解は、ルソーの社会思想とヘーゲルの社会哲学と深く通底するものである。ホッブズは、各人の自然権の放棄によって平和といのちと権利を守るための国家（コモンウェルス）という「力」を創造した。ルソーは、人びとの関係を通して共存のための一般意志という「法則」を取り出した。ヘーゲルは、相互承認の原理にもとづく関係を通して共同性（一般性）の形式としての市民社会や人倫国家という「場」を構想した。

さて、対するオークショットは、人は死を回避するという目的（＝最大善）のために義務（自然権の放棄）を負うと考える。自然権の放棄とは、自発的な自己否定の行為を遂行すること、すなわち義務にはかならない。善を目的として義務を遂行することによって国家と法が作りだされる。善のために秩序は作りだされるのである。

オークショットは、欲望や権利から出発するシュトラウスの主張を「合理主義説」（利己主義説）と名付け、「もつとも受け入れがたい」と全面的な論駁を試みる。もし、己の欲望や自由・権利が先にあるのなら、それは「利己的な人間」から道徳的行為を考えることである。己の自由を、したがって（シュトラウスのいうように）無条件の自然的権利から自然的義務を考えるのは、逆立ちした考えであり、そうした発想からは不安定で不確定な義務しかもたらされない。求められる道徳的行為は「すべての他者を自分と同等な者として私心なく承認する行為である」。こうした道徳的行為・道徳的義務は、現実の法（実定法）の下でこそ実現可能である。法の下で権利や正義は実現し、「関係」は保たれるのである。

オークショットは義務から出発する。自然状態の契約による不安定な義務よりも、国家による実定法の下での安定した公民的義務が目標である。

さらにまた、「善か悪か」を巡る二人の対立は、幸福に関しても捉え方が大きく異なる。シュトラウスは、幸福は最大の善であつても最高の善ではないといい、精神の安らぎ（エピクロスというアタラクシア）のような幸福Ⅱ最高の善を唾棄するのである。この点をオークショットは、シュトラウスがエピクロス主義を歪めたと批判する。もつとも受け入れがたいのは、シュトラウスがエピクロス理論を否定したことである。「重要な遺漏は、わたしが思うに、ホッブズ政治哲学をさらに別の政治哲学の伝統、すなわちエピクロス主義的伝統に関連づけていないことである。」^{（六五）}といひ、「かれ（ホッブズ）が掉さすエピクロス主義的伝統は、…（中略）…再建された自然法理論とホッブズのエピクロス主義的理論との融合であつた」という。^{（六六）}

オークショットは、「かれ（シュトラウス）の考えるホッブズの驚くべき斬新さとは自然法にかえて自然の要求ないし権利を、法にかえて意志を出発点にしたことである」^{（六七）}と半ば揶揄しながら批判する。シュトラウスは、義務は権利

から派生したこと、そして人間の意志に先行する自然法はないという。しかし、自然法理論は死ぬとかならず甦った。むしろホッブズ思想を「ストア派的自然法理論の再活性化をエピクロス主義的理論の接ぎ木によって達成しようとする運動」とみるべきである。こうしてオークショットは、自然法的義務の理論とエピクロスの幸福精神の安らぎという最高善との接合をめざすべきと考えるのである。

私の目には、善と義務を柱とするオークショットのホッブズ理解は、いくつかの点でカントの社会思想、とりわけ義務論に連なるように映る。オークショットの考える義務とは「自発的な自己否定の行為」の遂行であった。またその義務は、エピクロスの最高善精神の安らぎと分かちがたく結びついている。国家の実定法の下での義務の行き先は、「すべての他者を自分と同等な（＝人格）者」として扱えという道徳的義務となる。法の下で権利や正義は実現し、「関係」は保たれるのである。

カントの道徳的自由論では、自由は最高善という道徳的価値をめざすべしという（定言命法）。自由は価値に向かう義務と固く結びついている。道徳的行為が価値をもつには、いかなる傾向性（感覚的欲望）から離れてただ義務に基づいていなければならない。権利や道徳・倫理の根拠は、目に見えない内的原理にあるのであって、人間同士の「関係」からもたらされるのではない。市民社会において自由な人間同士が関係を結ぶが、それは「等しく強制法「純粹理性」の支配下にある」関係なのである（「」は筆者の補筆）。

□「ホッブズ問題」と三つの説への論評

さて、本稿を締めくくるにあたって、「ホッブズ問題」に関する三つの説―実定法説（オークショット）、自然法説

（ウォーレンダー）、合理主義説（シュトラウス）——にたいして私なりの論評を加えたい。三者のうち、「ホッブズ問題」を取りあげ考察し具体的に論述したのは、オークショットだけである。

まず、シュトラウスの場合。無条件の自然的権利が一切の自然的義務の基礎である。個人の自然権（自己防衛権）は決して放棄できない。つねにいのち＝自己保存の権利が最優先する。すべての人間が自己保存に必要な手段への権利をもち、そのための正しい手段の判定者でもある。暴力死への恐怖という情動が理性を動かし自然法を呼び起こし、社会契約（根本契約）によって主権＝最高権力が生み出される。自己保存のために平和をもとめ、自らの意志にもとづく合意によって主権を生み出すのは、正しい判断であり正しい手段を用いたといえる。

このように、自然状態で各人は自己の権利にもとづいて、自己保存のために同意という手段によって根本契約をなす。こうして主権者（コモンウェルス）が誕生する。ここには、社会秩序の形成に向けて自然権の放棄を躊躇するという「危うさ」はみられない。すなわち、シュトラウスの合理主義説においては、そもそも「ホッブズ問題」は存在しないのである。

次に、ウォーレンダーの自然法説においても、「ホッブズ問題」はありえない。元来、自然法は神の命令にもとづく道徳的義務によって人びとは結びつけられているのだから。神の命令として自然法は、永遠かつ不変のものである。「平和のためにたたかえ」という神の命令に、誰も躊躇することも背くことも許されない。自然法にもとづく義務が、つねに個人の権利に優先するのである。

さて、オークショットは、『リヴァイアサン』の「義務の理論」と論文「トマス・ホッブズの著作における道徳生活」の最後の「補論」において、「ホッブズ問題」の「解」として試案を提示して持論を展開したことは、すでに詳しくまとめた。ここで再度、その要点を確認したい。

——（まず、「義務の理論」での試案）。最大かつ唯一の利益「善」が、死の回避である。人は暴力死を回避するという目的（＝最大善）のために義務（自然権の放棄）を負うのである。義務は自発的な行為だから、本人から反故にすることはありえないはずであるが、にもかかわらず、「相互信頼の合意で第一の履行者になる人」は、一が八かの冒險である。自然状態における自然権の放棄は、きわめて不確実で不安定な義務であるのだ。だからこそ、義務を安定的かつ確実に遂行させるためには（自然状態を脱して）、外的な力、ルールが必要なのである。

——（つぎに、「補論」での試案）。自然状態における契約は、信約当事者の一方が取引上の自分の役割を先に履行しなければならず、裏切りにあう危険がある。しかし、信約遵守を強制する権威があると万人の承認する「共通権力」が存在すれば、状況は変わるだろう。

若干の難問が生じる。第一の履行者にとって道理に合わないほど危険なおこないであり、それゆえ分別のあるひとならあてにしないと考えられる。

ホッブズは二重で考えていた。まず、第一の履行者になることは理になつてゐる。道理に合わないほどの危険ではないし、失うものは獲られるものにくらべれば取るにたらないものだからだ。かなりの数の信約当事者が約束を守る、という理になつた期待は実際存在する。

主権的権威に服従する多数者間の信約においては、自発的に服従する頼もしいひとがそのつど十分な数だけいて、そういう輩を恐怖で服従させる程度の権力を主権者に授けてくれる、と考えるのは理になつてゐる。

もっぱらこの信約（社会契約）にともなう危険が、ふつうの相互信頼の契約（二者間の契約）にともなう危険にくらべればはるかに理になうという証明である。わたしは以上の説明が不完全もしくは未完成かもしれないという疑念をもたざるをえない。——（以上、二つの試案の要点まとめ）

一見してわかるように、オークシヨットの試案は「循環の構図」に陥っている。自然権の放棄によって共通権力がもたらされるはずなのに、「外的ルール」、「共通権力」がはじめにあつてこそ自然権を放棄させうるとしている。オークシヨットはそもそも自然状態に義務の存在を認めないし、自然権も義務とは無関係だという。ホッブズは平和のための「努力義務」と「法の下での義務」を混同したのだ。あてのならない実行不確実な「努力義務」よりも、「法の下での義務」こそ確実に実行可能である。主権者の定める公民法があつてはじめて平和のための努力が「法の下での義務」となるのである。

このように自然状態では義務の問題は解けないとし、しかし「主権者の定める公民法があつてはじめて平和のための努力が義務となる」とすることによって、オークシヨットは「ホッブズ問題」を消し去ってしまったといえるのである。

重田園江は、結局、オークシヨットを含め、シュトラウスとウォーレンダーらの「どの解釈も固有の意味ではホッブズ問題を解いていない」といい、その理由を「ホッブズ問題」の解の決定不可能性にあると考える。重田によれば、「誰がどんな理由で最初に武器を棄てるか」という問いは必ず社会学でいう「ダブル・コンティンジェンシー（二重の不確実性、double contingency）」に陥るという。それは、自分と他者の行為選択が互いに依存関係にあつて結局、決定不可能な状況になること、すなわち、ゲーム理論の「四人のジレンマ」がその一例である。さらに井上彰も「ホッブズ問題」のアポリアを「第一の履行者になることはゲーム理論的にありえない」とした。大澤もまた、前提のなかに結論を忍び込ませる構造を指摘し「ホッブズ問題」が陥る「循環の構図」を社会学理論のもつ共通の困難であるとした。

しかし私が思うには、「ホッブズ問題」を「循環の構図」ととらえゲーム理論上のアポリアとみなすのは、問題の本

質をとらえ損なっているといわざるをえない。「ホッブズ問題」の解の決定不可能性は、論理上の落とし穴にすぎない。その落とし穴の中に留まっていなくてはけつして問題の本質をとらえることはできない。自然状態において「誰がどんな理由で最初に武器を棄てるか」という問いは、シンプルにいえば、自然状態を脱して社会秩序に向かうのに、権利（自然権の保持）か義務（自然権の放棄）かという問いに置きかえられる。

この問いは、ちようど言語と社会の關係に似ている。コインに例えれば、言語と社会、権利と義務はいずれもが表にも裏にもなりうる。どちらが先かとは問えない。が、いずれを重視するかは決めることができる。シュトラウスは権利を重視し権利から義務は派生すると主張した。対してオークショットは義務が重要とみなし義務（法）の下で権利は確かになると引き下がらなかつた。二者間の「關係の領域」においては、権利か義務かを巡る対立や争いがくりかえされる。そこは〈私〉の自由と権利を巡る権力關係の場であり、したがって支配―被支配がいつでも入れ替わりうる場なのである。

しかしホッブズが腐心したのは、権利か義務かではなく、権利と義務が一致する地点の探索である。ホッブズは権利（自己保存の権利）を保持しつつ、権利（他人を殺す権利）を放棄すべしという。権利を保持したまま、義務を行うのである。そこは、権利と義務とが一致する地点である。問題は自然状態には、そもそも権利と義務など一切の正義の觀念が存在しないことだ。だから「ひとつの権力を想定」し、権利と義務の觀念を前提にした。これを社会学者は「循環の構図」と非難するのである。しかし、先にあきらかにしたように、人間存在や社会秩序においては、何らかの觀念を前提せざるを得ないのである（方法的循環論証の採用）。

そもそも「ホッブズ問題」の本来の問いは「社会契約（結社行為）」である。社会契約と契約とは根本的に次元の異なる概念である。社会契約によって「普遍ルール社会」を創設するうえでのアポリアが、「ホッブズ問題」である。社

会契約（結社行為）は、「普遍ルール社会」というまったく新しい「ゲーム社会」を創設することにあつた。もし、「関係の領域」がゲーム理論における主体の行為選択問題であるというならば、「秩序の領域」は新しいゲーム社会を創り出すというすぐれて新しい社会原理を生み出す問題である。この点を看過してはならない。「関係の領域」においては、ゲーム理論が指摘するように権利が先か義務が先かを巡って循環し二重の不確実性に陥るといえるかもしれない。が、しかし社会契約（結社行為）＝「秩序の領域」が求めるのは、権利と義務とが一致する地点を探しだすことである。そこでは、〈私〉の権利が他者への義務となり、他者の権利が〈私〉への義務となる。〈私〉と他者が互いに拘束し合いながら、ともに自由である。そのような地点こそ、ルソーのいう社会契約なのである。

「ホッブズ問題」において「関係の領域」と「秩序の領域」という領域の二重性が生じたのは、ひとえにホッブズ自身の責任である。すでに指摘したように、ホッブズは、社会契約をあたかも《相互の信頼による信約》として当事者（二者あるいはそれ以上の者）間の「契約」であるかのように描いた。オークションとシユトラウス、ウォーレンダーのうちただオークションだけは二重の領域が存在することに気づいていた。しかし、オークション自身が認めるように、二つの領域の違いを認めながらも自然状態から「秩序の領域」への移行を「不完全もしくは未完成」なものとして説明することしかできなかった。

私の考えをいうならば、「ホッブズ問題」の二重の領域性に自覚的であり、かつ「ホッブズ問題」に「解答」を与えたのは、ただ一人ルソーだけである。ルソーはまず『起源論』において「関係の領域」としての諸々の社会状態を詳細に考察した。諸々の社会状態においては、人びとはつねに自由、したがって権利と義務を巡る「支配―被支配」の関係に陥る。権利が先か、義務が優先するか。ここで問われるのは、〈私〉と他者の二者間の関係である。すなわち、〈私〉の自由がどのようにして〈私〉の権利になるかという問題である。

その後、ルソーは『社会契約論』において社会契約による「秩序の領域」を描いた。そこは、権利と義務とが一致する地点である。「秩序の領域」では、まったく新しい社会原理が展開される。ここでの根本問題は、「各人が、すべての人々と結びつきながら、しかも自分自身にしか服従せず、以前と同じように自由であること」である。この問いに対する答えが、社会契約である。ルソー的社会契約は、二者間の契約ではなく、すべての構成員による契約^(七〇)全員による結社行為である。すべての人は、等しい条件の下、留保なしに自分をすっかり与える。特定の誰かが特権を保持したり、上位者になったりしない。つまり「各人は自己をすべての人に与えて、しかも誰にも自己を与えない」のである。こうして〈私〉の権利は他者への義務となり、他者の権利は〈私〉への義務となる。社会契約によってもたらされる「秩序の領域」、すなわち普遍ルール社会は、権利と義務とが一致する地点である。そこは、すべての人びとが人権の主体（人格）として等しく自由でありながら、他者の自由を奪わないし奪われないような関係が保持される理念・原理・手立てを備えた場所なのである。

さて、これまでオークショットとシュトラウスの主張の対立点を確認し、また「三つの説」に対して私なりに論評してきた。ことごとく対立したオークショットとシュトラウスであるが、両者には譲れない一致点がある。それは「暴力死への恐怖」である。オークショットは、「暴力死への恐怖は人間の情念ないし感情のひとつで、道徳的であらゆる道徳的行為の根源であるという考え方は、たしかに新しく革命的ではある」とシュトラウスに同意する。「暴力死への恐怖」は、「ホッブズ問題」の原点に関わる問題である。もう一度、「ホッブズ問題」の最初の場面に立ち戻ってみよう。

ホッブズは、自然権を放棄する、したがって社会契約を行う際に、「はじめに履行するものは、かれの生命と生存手段をまもる権利（かれはそれをけつして放棄しえない）に反して、自己をうらぎってその敵にひきわたすのである」

といった。ここで放棄するのは「他者を殺す権利」であって「自分を守る権利」ではない。それは、攻撃権＝武器を放棄して丸裸になることだ。丸裸の〈私〉が武器を持った他者から攻撃されたらひとたまりもない。他者の暴力からいのちを守る術をもたない〈私〉が、もし自分のいのちを守れないとしたら、それは「自己をうらぎる」ことだ。よっていのちを守るには、ひとまず逃げるのがいい。先の「ホッブズの第三の特質」の説明であきらかにしたように、たとえ国家の命令であっても兵士として戦うことを拒否することができるし、死刑宣告を受けた身であっても生き残る希望を捨てないでいる。〈私〉は己のいのちを最後まであきらめないのである。〈私〉のいのちを守ることは、自己の権利であり自己への義務でもある。^{七三}

ホッブズの社会哲学には「いのちを最優先すべし」という思想が根底にあり貫徹されている。それは他者を殺さないし、他者から殺されないことである。「暴力死への恐怖」は、暴力を縮減し根絶することをもとめてやまない。「ホッブズ問題」の原点に立ちかえて見えるのは、いのちの最優先の思想に支えられた「暴力の縮減・根絶」こそが、近代社会＝新しい普遍ルール社会の出発点であり目標であることだ。^{七四}

この点に関して、哲学者竹田青嗣の慧眼鋭いことばで、本稿を締めくくりたい。

「哲学は、いかに歴史的な『普遍暴力』を抑制し、『普遍支配』から人間を解放しうるか、という点に中心的な課題を置いた。近代社会という理念は、この課題を実現するための哲学的『原理』として提示されたのである。」^{七四}（一）

（一） 本稿は、Web 学術誌『本質学研究』第六号（早稲田大学竹田青嗣研究室主監、二〇一八年一二月に掲載された拙稿『『ホッブズ問題』の現代解釈の原理的考察―オークショットとシュトラウスの議論を中心に―』に若

千の補筆・修正を加えたものである。

- (二) 論考『ホッブズ問題』の原理的考察(二)——ルソーの「純粹自然状態」の概念——その哲学的意義①」(『大阪経済法科大学法学論集第七四号』、二〇一五年一月、七七—一二頁) および、論考『ホッブズ問題』の原理的考察(二)——ルソーの「純粹自然状態」の概念——その哲学的意義(つづき)②」(『大阪経済法科大学法学論集第七六号』、二〇一七年三月、一九—六三頁)
- (三) 「ホッブズ問題(Hobbesian problem of order)」とは「個人には主体的な(主意思義的な)選択の自由があつて、完全に自分の利益だけを追求することができるともかわらず——つまり利害の不一致から対立闘争が帰結するはずなのに——社会秩序が成立するのはなぜか」という問いである。(『社会的行為の構造／一 総論』タルコット・パーソンズ、稲上毅他翻訳、木鐸社、一九七六年、一五〇—一五一頁)
- (四) 「社会秩序はいかにして可能か」は社会学の基本的な問いである!」大澤真幸「社会学・入門」所収、別冊宝島一七六、一九九三年五月、三八—四〇頁
- (五) 『自然権と歴史』レオ・シュトラウス、塚崎智・石崎嘉彦訳、ちくま学芸文庫、筑摩書房、二〇一三年、二四八—二四九頁
- (六) 「トマス・ホッブズの著作における道德生活」、『リヴァイアサン序説(Hobbes on Civil Association)』(マイケル・オークショット、中金聡訳、叢書・ウニベルシタス八七六、法政大学出版局、二〇〇七年)所収、一〇一頁
- (七) 『リヴァイアサン序説(Hobbes on Civil Association)』マイケル・オークショット、中金聡訳、叢書・ウニベルシタス八七六、法政大学出版局、二〇〇七年、一二四頁—一二五頁
- (八) Warrender, Howard, *The Political Philosophy of Thomas Hobbes*, Oxford: Clarendon Press, 1957

（九）ホッブズの義務論的解釈の動向と義務に関する論争については、矢島信の以下の論考を参考にした。「義務・

意志論・自由意志論争ーホッブズ研究史の一断面」矢島信著、『政策科学 山根宏教授退任記念論文集』一九
卷四号（通巻五一号）所収、二〇一二年三月、立命館大学政策科学会刊

（一〇）『リヴァイアサン』ホッブズ、水田洋訳、岩波文庫、一九九二年、二一七頁

（一一）「トマス・ホッブズの著作における道德生活」、前掲書、二〇〇七年、一二二頁

（一二）中金聡は、オークショットのホッブズ研究、とりわけ「リヴァイアサン序説」の中心的関心は、「なぜわたしは政治的權威に服従しなければならないのか」の問い、すなわち政治的義務の理論としたうえで、オークショットのいう三つの説をとりまとめている。まず①合理主義説（シュトラウス）に対して、中金はこれを「利己主義説」と言いかえ、自己保存を目的とする人間が合理的な計算（理性）によって自然状態の自由よりも臣民としての服従を選択する。こうしてシュトラウスはホッブズ的人間に「ブルジョアの道德性」の成立をみたのである。つぎに②自然法説。A・E・テイラーは、自己保存は行為の定言命法たりえないとみなし、利己的心理學と「なんら必然的な関連をもたない」厳格な倫理學的教義がホッブズの自然法論に存在すると主張した。これら二つの見解に対して③実定法説。オークショットは主権者の定める法があつてはじめて臣民に道德的義務が生じるとして、自然状態にあらかじめなんらかの義務があるという説を否定したのである。（前掲書、マイケル・オークショット、二〇〇七年、二二一―二二二頁）

（一三）同上書、二〇〇七年、一四五頁

（一四）『社会契約論』重田園江、ちくま新書、筑摩書房、二〇一三年、六四―六六頁

（一五）重田によれば、レオ・シュトラウスとウォレンダーの説は「ホッブズ問題」を解決するのではなく、問題自

体をないものとしてしまふ。情念と理性の組み合わせによつて政治社会がもたらされるのならば、秩序形成に向かう最初の武器の放棄（自然権の放棄）は必要なくなる（シュトラウス）。また、神の命令にしたがつて被造物の人間が平和に向かうなら、「ホッブズ問題」は生じえない（ウォレンダー）。それに比べてオークショットは、政治社会は理性の力によつて到達できるものでもないし、また神からあらかじめ与えられているものでもない。重田は、三者の主張はいずれもホッブズ問題を解いていないとしつつ、オークショットの説を最も評価する。オークショットはホッブズのいう政治社会の人工性、あるいは共同性を本質とすることを的確にとらえているからだ。とはいえ、オークショットは自然状態と社会状態の違いを強調することによつて誰が最初に武器を棄てるかという問いは、ますます際立つ。やはり、オークショットはその説明がうまくいかないことを認めている。むしろ、ホッブズ問題には解がないと認めよう。そうすることによつて、「むしろホッブズにおける秩序生成の瞬間、自然状態と政治社会との断絶が際立つのだ」という。ホッブズにおける政治とは、人間たちがその共存の条件を自分たちで定め、共同性の行く先をその都度見つけて行くような、外部の始原もなければ終極の目的もない活動なのだ。それは、死ぬまで運動続け死ねば静止する運動体としての人間たちが、生きているあいだ他者とともに活動をつづける、彼らの居場所だ。「ホッブズは仮言的、条件法的な政治社会を再構成しようという。もしあなたが私と同じく武器を棄てるなら、そこに現れる政治社会とはこんなものである。『こうして人と人との間に、他の何も依拠することなく現れる共同性、はじまりの場所を名指すのが、『社会契約』の典型的なあり方なのだ。』（『社会契約論』重田園江、ちくま新書、筑摩書房、二〇一三年、六四―六九頁）

（一六）前掲書、レオ・シュトラウス、筑摩書房、二〇一三年、二四九頁

（一七）筆者は、この問いを「ホッブズにとつての『ホッブズ問題』」として拙稿「『ホッブズ問題』の原理的考察（二）——ホッブズからルソーへ、「社会契約論」の系譜で」（『大阪経済法科大学法学論集第七一号』、二〇一二年五月、一五一—一九頁）で詳細に論じた。

（一八）『トマス・ホッブズ』リチャード・タック、田中浩・重森臣広訳、未來社、一九九五年、一三〇—一三一頁

（一九）『リヴァイアサン1』ホッブズ、水田洋訳、岩波文庫、一九九二年、二二二頁

（二〇）同上書、ホッブズ、岩波文庫、一九九二年、二二二頁

（二一）同上書、ホッブズ、岩波文庫、一九九二年、二二四頁

（二二）「契約の履行の強制力」に関して、民法五三三条〔同時履行の抗弁〕は、双務契約における当事者双方にたいして、買い逃げ（代金を支払わずに品物だけを受け取って逃げてしまうこと）や、売り逃げ（品物を渡さず代金だけを受け取って逃げてしまうこと）をとともに禁じている。それができるのは、法という強制力があるからだ。

（二三）同上書、ホッブズ、一九九二年、二二六—二二七頁

（二四）『社会契約論』ルソー、桑原武夫・前川貞治郎訳、岩波文庫、一九五四年、三〇頁

（二五）同上書、ホッブズ、一九九二年、二二七頁—二二八頁

（二六）同上書、ホッブズ、一九九二年、二二六頁

（二七）同上書、ホッブズ、一九九二年、二二八頁

（二八）『リヴァイアサン2』ホッブズ、水田洋訳、岩波文庫、一九九二年、二二五頁

（二九）『ホッブズの政治学』レオ・シュトラウス、添谷育志・谷喬夫・飯島昇蔵共訳、みすず書房、一九九〇年、

(三〇)『リヴァイアサン1』ホップズ、水田洋訳、岩波文庫、一九九二年、二三〇—二三二頁

(三一)『リヴァイアサン2』ホップズ、水田洋訳、岩波文庫、一九九二年、九七頁

(三二)『「ホップズ問題」と可謬主義的ルール論』井上彰、Open Society Forum (Open Universe of the Japan Popper Society) 掲載論文、一九九七年一二月

(三三)『リヴァイアサン1』ホップズ、中公バックス世界の名著「ホップズ」、一九七九年、一六〇—一六一頁

(三四)『道徳形而上学原論』カント、篠田英雄訳、岩波文庫、一九六〇年、一〇五頁

(三五)これまで発表した論考・研究ノートはつぎの通り。(一)論考『「ホップズ問題」の原理的考察(一)——ホップズからルソーへ、「社会契約論」の系譜で』、『大阪経済法科大学法学論集第七一号』、二〇一二年五月、一—三六頁、(二)論考『「ホップズ問題」の原理的考察(二)——ルソーの「純粹自然状態」の概念——その哲学的意義①』、『大阪経済法科大学法学論集第七四号』、二〇一五年一月、七七—一二頁、(三)研究ノート「突き詰めて考えること、深く納得すること——ルソーの本質直観の方法」、『大阪経済法科大学法学論集第七五号』、二〇一六年三月、三四—三五七頁、(四)論考『「ホップズ問題」の原理的考察(二)——ルソーの「純粹自然状態」の概念——その哲学的意義(つづき)②』、『大阪経済法科大学法学論集第七六号』、二〇一七年三月、一九—六三頁、(五)論考「ルソー的「円環」の社会構想——理想と現実の相克」、Web学術誌『本質学研究』第四号(大阪経済法科大学法学論集第七七号)、二〇一七年十二月、五一—一〇〇頁、一一二四頁、(六)『「ホップズ問題」における「二重性」の原理的考察——パーソンズからルソー、ヒュームへ』、『大阪経済法科大学法学論集第七八号』、二〇一八年三月、五一—一〇〇頁

(三六)「普遍ルール社会」は、竹田青嗣が概念化し名づけた用語である。竹田は、「近代(市民)社会」の核心的理念は、

社会から「暴力原理」を完全に排除し、これを純粋なルールゲームに変える試みであるという。（竹田青嗣著『人間の未来』ちくま書房、二〇〇九年、一三二―一三三頁）。

（三七）『ホッブズ問題』における「二重性」の原理的考察——パソンズからルソー、ヒュームへ、『大阪経済法科大学法学論集第七八号』、二〇一八年三月、五一―一〇〇頁

（三八）タルコット・パソンズ『社会的行為の構造／一 総論』（第五卷）、稲上毅他翻訳、木鐸社、一九七六年、一九〇頁

（三九）パソンズは、「社会学は『共通価値による統合という属性によって理解することのできる社会的行為体系に關する分析的理論の展開をめざしている科学である』と定義する」。（タルコット・パソンズ『社会的行為の構造／一 総論』第五卷、稲上毅他翻訳、木鐸社、一九七六年、一九一頁）

（四〇）『ソクラテスの弁明——エウチュプロン、クリトン』プラトン、本光雄訳、角川文庫、一九七三年、一二二―一二五頁

（四一）『世界は四大文明でできている』橋爪大三郎、NHK出版新書、二〇一七年、七四―八八頁

（四二）『社会契約論』ルソー、桑原武夫・前川貞治郎訳、岩波文庫、一九五四年、二九頁

（四三）ルソーは、「自由とは自分自身の主人となることである」という。

（四四）『リヴァイアサン序説（*Hobbes on Civil Association*）』マイケル・オークショット、中金聡訳、叢書・ウニベルシタス八七六、法政大学出版局、二〇〇七年、七六―八三頁

（四五）『リヴァイアサン2』ホッブズ、中公バックス世界の名著「ホッブズ」、一九九二年、九五頁

（四六）『トマス・ホッブズの著作における道徳生活』、『リヴァイアサン序説（*Hobbes on Civil Association*）』（マイケル・

オークショット、中金聡訳、叢書・ユニベルシタス八七六、法政大学出版局、二〇〇七年）所収、一六〇—一六七頁

(四七) 前掲書『リヴァイアサン2』、一九九二年、三三頁

(四八) 『社会契約論』ルソー、桑原武夫・前川貞治郎訳、岩波文庫、一九五四年、二八頁

(四九) Warrender, Howard (1967), *The Political Philosophy of Thomas Hobbes*, Oxford: Clarendon Press, p.322
訳出は筆者。

(五〇) 同上書、Warrender, Howard (1967), p.43 訳出は筆者。

(五一) オークショット対ウォレンダーの議論の要点は、中金聡の「解説 ホッブズとオークショット」に詳しく述べられている（「トマス・ホッブズの著作における道徳生活」、『リヴァイアサン序説 (Hobbes on Civil Association)』(マイケル・オークショット、中金聡訳、叢書・ユニベルシタス八七六、法政大学出版局、二〇〇七年) 所収、二〇七—二四六頁

(五二) 「ホッブズ道徳哲学における自然法」裁本沙織、『実践哲学研究』(二〇〇九年、三二号) 所収、京都大学文学研究科倫理学研究室発行、三七頁—七八頁

(五三) 前掲書『リヴァイアサン2』、一九九二年、二八六頁、《神の三重の語、すなわち、理性と啓示と予言》から引用。

(五四) 前掲書『リヴァイアサン1』、一九九二年、二二八頁

(五五) 前掲論文、裁本沙織、『実践哲学研究』所収、二〇〇九年、五九頁

(五六) 前掲書『リヴァイアサン1』、一九九二年、二五四頁

(五七) 「義務・意志論・自由意志論争——ホッブズ研究史の一断面」矢島信著、『政策科学 山根宏教授退任記念論文集』

一九卷四号（通卷五一号）所収、二〇二二年三月、立命館大学政策科学会刊、二五〇頁

（五八）中金聡は、「自己保存を道徳的至上目的とする人間が、合理的な計算によって自然状態の自由よりも臣民としての服従を選択するのだと主張する利己主義説であり、ホッブズの人間に『ブルジョア的道德性の成立をみたシュトラウスが代表格である』と述べている（前掲書、マイケル・オークショット、中金聡訳、二〇〇七年、「解説 ホッブズとオークショット」所収、二一九頁）。

（五九）『ホッブズの政治学』レオ・シュトラウス、添谷育志・谷喬夫・飯島昇蔵共訳、みすず書房、一九九〇年

（六〇）ホッブズは、死刑に関してつぎのように述べている。「《人が、かれ自身を防衛しないという信約は、無効である》力に対して、力によって私自身を防衛しないという信約は、つねに無効である。なぜならだれでも、自分自身を死と傷害と投獄（それらを回避することが、どんな権利を放置するについても唯一の目的である）からすくうという権利を、譲渡または放置することはできないからであり、したがって、力の抵抗しないという約束は、どんな信約においても、なんの権利も譲渡しないし、義務づけもしない。∴（中略）∴『私がこれこれのことをしないならば、あなたが私をころしにくるときに、私はあなたに抵抗しないだろう』と信約することはできないのである。なぜなら、人間は本性によって、抵抗しないことによる確実な現在の死というおおきな害悪よりも、むしろ、抵抗における死の危険というちいさな害悪を、えらぶものだからである。そしてこのことは、犯罪人たちが、かれらを断罪する法律に同意したにもかかわらず、人びとがかれらを処刑と牢獄へつれていくのに武装した人びとをつきそわせることにおいて、すべての人びとに真実として容認されているのである。」（前掲書『リヴァイアサン』、一九九二年、二三〇—二三二頁）

（六一）この箇所の全文はつぎの通り。「《かれらは、自発的におこなうのでなければ、戦争するように拘束されはし

ない》このことにもとづいて、兵士として敵とたたかうことを命じられるものは、かれの主権者が、かれの拒否を死をもって罰する十分な権利を有するにもかかわらず、おおくのばあいには、不正義なしに拒否しうる。
 …（中略）…軍隊がたたかうと、一方または双方に逃亡者がでる。しかし、かれらがうらぎちからではなく恐怖から、そうするならば、不正ではなく不名誉に、それをするとみなされるべきである。（前掲書『リヴァアサン』、一九九二年、九七頁）

（六二）『ジュネーブ草稿』、中山元訳、光文社、二〇〇八年、『社会契約論／ジュネーブ草稿』所収、三二〇頁

（六三）前掲書、レオ・シュトラウス、筑摩書房、二〇一三年、三四三頁

（六四）『社会契約論』ルソー、桑原武夫・前川貞治郎訳、岩波文庫、一九五四年、五〇頁

（六五）『レオ・シュトラウス博士のホッブズ論』、『リヴァアサン序説（*Hobbes on Civil Association*）』（マイケル・オークショット、中金聡訳、叢書・ユニベルシタス八七六、法政大学出版局、二〇〇七年）所収、一九四頁

（六六）同上書、オークショット、二〇〇七年、一九八頁

（六七）同上書、オークショット、二〇〇七年、一九七頁

（六八）同上書、オークショット、二〇〇七年、一九八頁

（六九）カント、「理論と実践」、『啓蒙とは何か』篠田英雄訳、岩波文庫、一九九六年

（七〇）前掲書、ルソー、二〇〇二年、二九頁

（七一）『レオ・シュトラウス博士のホッブズ論』、『リヴァアサン序説（*Hobbes on Civil Association*）』（マイケル・オークショット、中金聡訳、叢書・ユニベルシタス八七六、法政大学出版局、二〇〇七年）所収、一九四頁

（七二）田中浩は、「ホッブズは『人間』を死に至るまで生命運動を続ける存在として捉えたことによって、『生命の安全』

を最高善へとつながる基本原理としたのである」と指摘する（『ホッブズ—リヴァイアサンの哲学者』田中浩、岩波新書、二〇一六年、四〇頁—四二頁）

（七三）竹田青嗣は「ホッブズの『原理』は、『国家』の第一の機能は支配ではなく、『暴力の縮減』であること」であると指摘する（竹田青嗣『人間の未来—ヘーゲル哲学と現代資本主義』ちくま新書、二〇〇九年、五〇頁）。

（七四）『欲望論』（第一巻、「意味」の原理論）竹田青嗣、講談社、二〇一七年、一四頁

